



ハワイ大学語学研修の記録

2015/04/02

ハワイ大学語学研修を実施する意義

学生たちは、このハワイ大学語学研修から沢山の学びを得た。プログラムの事前学習で一鳥正真名誉教授よりハワイ日系移民の歴史を知り、その当時の人々の暮らしとその宗教観を学んだ。観光地として知られているオアフ島には、多くの日本人が日本より移民をし現在の日系社会を作った背景がある。今回の研修では、ハワイ浄土宗別院、そして天台宗ハワイ別院を訪問した。また、ハワイ日本文化センターにも訪問した。更に言えば、ハワイ大学宗教学部学部長ライアン先生による、ポリネシアン文化の変遷とハワイ島の神々と現代社会を取り巻く様々な問題を学んだ。この、研修の背骨は、外から見る日系移民の歴史を知りながら現代のハワイを学ぶことであった。それ以外にも、勿論、英語力を身に付けることに重点が置かれた。コミュニケーション能力を身に付けるために、ハワイ大学の学生と沢山、話げできた。相手に伝える力をつけること、それが今、求められている。

もう一つ学生たちは学んできた。社会性— 同じ目的を持った学生が27名集まり、行動をすることの難しさ。自分思ひだけを通しては、何もうまくいかないことをまなび、集団の中の自分を見出すこと。社会適応能力を高めることで自分を成長させることができること。時間を守り、約束事を守り、自主的に行動すること、これは、今の若い人々が最も苦手とすることを、語学研修の集団の中で学ぶ。

ハワイ大学語学研修を通して学ぶことはたくさんある。

内向化が進む大学の中で

日本の学生に「内向化」が進み、その結果「海外に出ない」「留学は面倒」「わざわざ苦労するのは」という学生が増加傾向にあることが報告されている。確かに、大正大学においても同様の動きや傾向がここ数年見受けられる。特に男子学生の内向化は顕著になっているように思われる。今回のハワイ大学の研修を通して参加者の全体数で女子学生8に対して男子学生2の割合になっている。男子学生は更に、内向化が進んでいる。この主な原因は、他大学でも同じであろうが、大学生活の中で時間的な余裕と金銭的な余裕が持てない学生と言語での障壁が、その原因となっているように推察される。このプログラムには、保護者のハワイへのステレオタイプ観が参加者少なからず見え隠れしていた。

本校が実施している「ハワイ大学春期集中講座」も上記のような影響を受け、参加者の数が少なかったが実施する事で一人でも学生を海外に送り出す機会を与えることに重きを置きプログラムを実施している。

この号の内容

| | |
|----------------|---|
| 語学研修を終えて | 1 |
| 各学生レポート | 2 |
| 研修資料 | 3 |
| 付録 | 4 |

重要な日付

| | |
|-------|-------------|
| 02/07 | 成田空港に集合でした |
| 02/21 | ダイヤモンドヘッド登山 |
| 03/01 | 思い出の写真 |



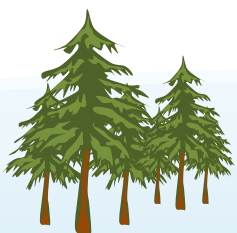
私は今回のハワイ大学語学研修が初めての海外経験だった。今までの日本の生活に比べ、ハワイでの3週間の生活は、海外に出てみなければわからない感覚や考え方を知ることができ、非常に有意義なものになった。この経験から、私はアメリカ人の考え方や歴史、観光物などを日本と比較しながら述べていく。そして、海外に出たことで感じたことや、国際的な視野に立ったことで感じ、考えさせられたことについても述べていくことにする。

まず、第一にアメリカ人の考え方や文化に私は衝撃を受けた。なぜなら、初対面の人にも恥ずかしがることなく積極的に話しかける姿勢、出会ったら握手やハグで迎える明るさに驚いたからだ。私は今まで日本に住んでいたため、このような文化を目の前で見るのは初めてで、迎えられた私は非常に嬉しく、とても気分が良くなった。アメリカの人たちのような出迎え方を日本ですれば、非常に驚かされてしまう。しかし、実際にされて嬉しいことであれば日本人もこのような出迎え方を真似してみるのには良いことだと私は考える。さすがにハグまではやり過ぎにしても、握手やハイタッチは関係をより親密にさせ、お互いのお互いの気分を良くするものではないだろうか。私は他にもアメリカの文化で学ぶべきことがあった。それは、積極性である。アメリカの文化は恥ずかしがらずに、思ったことがあれば積極的に発言するのだ。これについては、ハワイ大学で授業を受けているときに担任の先生から、「Don't be shy」と何度も言われた。日本人は自分の意見があっても、まわりをうかがったり、人前で発言することを恥ずかしがったりして、消極的になってしまうことが多くある。先生に質問されて、すぐ答えずに、まわりをうかがってしまったことが私を含め、私のクラスでも実際にあった。担任の先生が、日本人は内気であるということをよく理解していらっしゃるおかげで、3週間の間、積極性の重要性についてしっかり教えていただいた。また、冗談を交えながら、アメリカらしく楽しい雰囲気での授業をしていただいたおかげで、3週間が終わるころには、私たちのクラスは最初に比べ非常に積極的に発言するようになっていた。そして、積極的に発言することで、授業が活発化し、より多くのことが学べた。この経験から積極性の重要性を身に染みて感じ、日本人ももっと積極的になるべきだと思った。また、授業もみんなが積極的に発言した方が、雰囲気が良くなり、楽しく授業が進むのだ。これらのことから、私は日本に帰ってからも、ハワイで学んだ積極性を忘れずに生活しようと心がけている。

第二に、ハワイでは歴史についても学んだ。日系移民の歴史や、ハワイの成り立ちなど、様々な種類の歴史を学んだが、その中でもパールハーバーの戦艦ミズーリ記念館に行き、戦争の歴史を学んだことは非常に印象深く残っている。戦艦ミズーリは1945年9月2日、連合軍隊が見守る中、ミズーリの艦上にて、マッカーサー元帥率いる連合軍側と重光葵全権率いる日本代表との間で調印式が行われた場所として知られている。戦艦ミズーリは非常に大きく、近くでみるとその大きさに圧倒された。船上では、日本人ガイドの方もいて、30分ほど、一緒に回って解説していただいたので非常に勉強になった。自分たちが、知らないような豆知識を教えていただき、歴史についてより深く学ぶことができた。戦艦ミズーリを含めたパールハーバーは日本人観光客がほとんどおらず、アメリカ人がほとんどだった。歴史的背景として、日本が敗れた戦争の負の遺産の場所を見に行きたくないということも、もしかしたら関係しているかもしれない。もしくは、ハワイという華やかなところに来て、わざわざパールハーバーにはいかないという理由かもしれない。

どちらにせよ、私はパールハーバーに行ってみて思ったのは、日本人はもっとパールハーバーに行くべきだということである。歴史的に様々な事情があったにせよ、日本がアメリカのパールハーバーに先に攻撃したことに変わりなく、日本人として戦争は二度としてはいけないということを再認識する意味でパールハーバーに行くことはとても大切なことである。私はパールハーバーに行き、様々なことを感じ、そして正しい歴史を理解することがこれから平和を守っていくことに繋がると考える。今回、私はパールハーバーに行くという貴重な経験ができたので、パールハーバーで学んだことを、しっかり復習しこれからの世代に伝えていきたい。

最後に、私はハワイ大学語学研修で本当に素晴らしい人たちと出会い、そしてとても貴重な経験をすることができた。その背景には、たくさんの方々のご尽力があり、そのおかげで貴重な経験をすることができたので、感謝の気持ちを忘れずに、これからの大学生生活に生かしていきたい。



はじめに、今回、このプログラムに参加して貴重な経験を数多くさせていただくことが出来た。もし、このプログラムに参加していなかったら私はもったいない時間を過ごしていたに違いない。そして、このプログラムに参加したおかげでいろんな思いと出会いと教養が私の重要な財産となった。

初めての海外ということもあり、とても緊張した。また、私はこれまで周囲の人々からの多くの経験談や影響により海外にとっても興味をもっていた。だが、語学力はほとんどなく苦手科目でさえあった。そんな力も十分に身につけていなかった私は、現地に行ってみて初めて自分の語学力の乏しさという壁に直面した。

初日のガイダンスでは、全くハワイ大学の先生方のお話が耳に入ってこなかった。きっと中学校や高校の時に習ったような言葉が、その話の所々にちりばめられているのだろうが、緊張もあってかには何を話しているのか全く分からなかった。また、自己紹介が始まったとき、共に参加した仲間たちが淡々と英語で自己紹介をする姿に圧倒された。私は、これから3週間何もわからないまま終わってしまうような気がしてはじめは本当に不安でいっぱいだった。

それから数日間は、授業中に担任の先生から声をかけられても、インターチェンジの学生さんと会話をするときも、何を話しているのかわからないことに悔しさを感じていた。このままで終わりたいと思わなかった私は、小さなことから変えていこうと考えた。渡されたテキストやプリント、班のメンバーと英語での会話、メディアや音楽で英語を聞く、見る力を身につけていこうと。班のメンバーの先輩がとてもよく英語を話すことのできる先輩がいた。その先輩に、英語で会話をしてもらったりすることをたびたび協力してもらった。わからなかった言葉は聞き返して日本語の意味を教えてもらったりもした。その小さいけれど、生活の中であたりまえに英語を取り入れてみると授業での英語の聞こえもよくなり、先生の話していることも単語や少しの知識を引き出しながら理解することができるようになっていった。その時は、本当にうれしかった。わかることがうれしい。これがきっかけで私はもっと英語を聞いてみたい！と強く思い、時折、寮ではテレビを見るようになった。授業での話を聞き取れるようになってきた頃、私はまた次の壁に直面した。理解をしているにも、ポキャブラリーや英単語、文法教養の乏しさから言いたいことを英語で口にするのができなかったのである。ちゃんとした分と言わなきゃ伝わらないだろうという強い思いから、何も言うことができなかった。だが、ある時、担任の先生が文法は気にせずとりあえず話してみることを伝えた。その時から、私は一歩踏み出してみようと思った。伝わるか伝わらないかはやってみてから。まずは、つぎはぎの単語でできた文でも相手に話してみる。いざやってみると、伝わらずもどかしかったり、歯がゆい思いもしたが、私が内容を理解して返事をしようとしている姿勢が伝わったのか、その返事を一生懸命つたない文の中から理解しようとしてくれた。とてもうれしかった。話してみたら、案外伝わることもある。時には、正しい英語の言い回し、答え方を教えてくれることもあった。そんな体験をしたことで、私はまず、“何もできない私”でいることをやめた。その時から、少し苦手だったインターチェンジの時間も楽しみで仕方なかった。よくわからない時もあるけれど、話そうとすることで違う国に住んでいるこの人たちと私は今、コミュニケーションをとっている。そんな実感がどうしようもなく一日一日をわくわくさせた。完璧に理解できないことは悔しい、けどちょっとでも体験したわかるとうれしさを原動力に日本に帰ってからもっともっと英語力を高めるために勉強しようとして強く心に決めた。

次に、歴史の面に触れようと思う。歴史は、様々な場所を訪れることでハワイと日本のつながりを知ることができた。特に日本からハワイへ移り住んだ先住民の歴史には様々な思いが込み上げてきた。

先住民としてきた日本人は、ハワイは夢のような場所だと聞かされ、そう信じて来てみると、とんでもない重労働と差別が待ち受けていた。という話を聞いたとき私は、涙が一気にこみ上げてきた。今でこそ私たちは理想と思い描いたままのハワイにいますが、当時の人々はそれとはかけ離れた生活を強いられていたと思うととても悲しい気持ちになった。しかし、真面目で堅実な日本人が多く、そんな苦しい中で頑張ってきた人々が数々の功績を残し、ゆくゆくは、それらが認められ、先住民の生活は徐々に豊かになっていった。

そのため、現在こうして日本人が旅行や私たちのように提携留学といったことが可能になったのである。先人あつてのハワイと日本の友好関係なのだ。私は、それをここに来るまで知らなかった。また、もし来ていなければ知ることはなかっただろう。ゆえに、これは日本に戻ってからいろんな人に教えたいという気持ちが込み上げた。ハワイにあたりまえに行ける“今”に私たちは感謝しなくてはならない。また、この積み重ねを無下に壊してしまわないようにもっとハワイと日本のつながりに由縁する歴史を多くの日本人に知ってほしい。

もう一つ、ハワイに来て感じたことは、リゾート地化に伴った、現地の日本語利用可能場所の増加についてである。確かに、日本語が伝わることは便利だ。旅行できている日本人もほとんど日本語で会話をしている。そのことを否定はしないが少し残念に思う。せっかく異国に来ているのだからその土地の言葉で生活してみた方がよりその国を体感できるのではないかと思うからだ。私は街を歩いていてしばしば、日本にいるような錯覚を覚えた瞬間があった。せっかくハワイにきて、ハワイに根付いた言語もあるのに使わないのだろうと。知らない日本人同士も、なんとなく日本人だとわかると日本語で声をかけていたりする。私自身も班員と一緒にいるとついつい日本語に頼りっぱなしになることもあったため、その気持ちはとてもわかる。だが、本当にそれでいいのかとも思ってしまう気持ちがあった。

最後に、ハワイ（オアフ島）の人々、食べ物、たくさんのビーチ、ファーマーズマーケット、文化どれもこれも日本もこんな感じならいいのと思うものに溢れていた。この地でのびのび勉強し、英語の語学力を身につけていけたらどんなに幸せなのだろうとも思った。帰国してからは、ハワイシックでさえある。このような思いや体験から、この先1年間、ここに留学したいという思いが高まった。留学でなくとも、英語を話すことに力を入れて、いつかまたここに戻ってまた力を試したいと強く思った。このような貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございました。

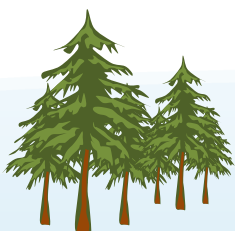


私にとって、海外に三週間も滞在した経験は今回が初めてであった。今までは家族で何日間か旅行に行くだけが普通であり、私の中で海外というものは単なる「観光」でしかなかったのだ。今回の語学研修にも多少は観光的な要素が含まれていたかもしれない。だがしかし、これまで私が体験してきた単なる旅行とは大きな違いがあった。それはやはり「言語」である。私が家族と海外旅行へ行く際、たいてい日本語の通じる従業員がいるホテルなどに宿泊することが多い。また私の両親も英語教師という職を持っているため、私が何もしなくても両親が勝手に英語でやりとりをすることが普通だった。そのため、私自身が自ら英語を使う機会は少なかった。しかし、今回の研修ではインターチェンジや国際交流といったプログラムに参加することがあったため、普段の海外旅行と比べたら英語の使用度が上がったと確信している。

私は国際交流に参加した時に感じたことが一つある。私は日本で生活している外国人と会話したことはあるが、現地のみで暮らしている人と英会話をすることは初めてであった。日本で生活している場合、日本語が分からなくてもある程度日本人と意思の疎通をはかることは可能なのだ。よって、会話をする時の難易度は現地の人と交流する時の方が上であった。なぜなら彼らは普段日本人のいない環境下で暮らしているわけであって、日本人とコミュニケーションをとるときは「英語」のみが手段だからだ。このようなことは実際に海外に行かないと気づかないことなので、学べたことには意味があると私は考えている。

今回の研修では、語学面だけでなく現地の文化や歴史について学ぶ機会もあった。社会に出てから直接必要とすることはないかもしれないが、本場のフラダンスや日系移民について学ぶことはハワイを訪れた大きな意味に繋がるであろう。親元を離れて海外で暮らすということは誰もが容易に経験できるわけではない。私たちが経験したことはこれから社会に出ていつか英語を話す機会に恵まれたとき、必ず役に立つと信じている。教科書を見ながら勉強することも我々の英語学習には必要であるが、実際に海外へ出て学ぶことのほうが英語を話す勇気へとつながるであろう。もちろん勉強面だけでなく、海外で人脈の輪を広げるための練習をする良い機会にもなったと感じている。外国人との小さなコミュニケーションも、何度も積み重ねていけば海外でビジネスを営むときに役立つ可能性が十分にあるからだ。「学生」というひとつの特権を利用してもらうことにより、将来の自分たちのために大きな一歩を踏み出したといえるだろう。たった三週間という短い期間ではあったが、今回のこの研修に参加できたことを私は誇りに思っている。これまで経験してきたような単なる海外旅行では、現地の方とSNSを交換し合う機会もなかったが、今回はハワイ大学の講師や複数の生徒と交換することができた。日本に帰ったあとでもお互いのことを知り合うことが可能になったため、私のコミュニケーション能力は確実に向上したと考えている。

今回の研修ではハワイ現地で有名なダイヤモンドヘッドやイオラニパレスといった観光名所を訪れる機会もあったため、現地の文化や歴史を知る良いきっかけにもなった。ここで体験したことを一つの強み、または思い出としてこれからの人生に活かしていきたいと思っている。支えてくださった先生方や文科省の方、そして莫大な予算を負担してくれた両親に感謝の気持ちを忘れず、自分の将来にプラスになるよう努力したいと考えている。



私は、今回が初めての海外だったので、見るものや触れるもの全てが驚きの連続でした。今まで見たことのない植物や鳥など、新しいことを発見する度に海外にいるのだと実感させられました。私は、入学当初から大学卒業後にアメリカへ大学院留学をしたいと考えていました。その留学の前に、語学力の向上と海外の大学や文化に触れることを目的に今回の語学研修に参加しました。私は、今回の語学研修で英語だけでなく、さまざまなことを学びました。

最初に、ハワイの宗教や文化、日系移民の歴史についてです。ハワイでは、自然を神様だと考えており、全てのものに神様が宿るという考えを持っています。日本でも、山の神様を信仰する地域などがあり、私は、このようなハワイの信仰の考え方が日本の八百万の神と似ていると思いました。また、自然を神様だと信仰する考え方は、ハワイの自然を大切にしているハワイアンならではのと思いました。ハワイの文化では、ハワイ語や地名の由来、伝統的な食べ物などを学び、ハワイを表面だけでなくその奥まで知ることができました。初めて身をもって他国の文化を知るなかで、他国の文化を学び、相違点やお互いの文化の良い点を見つけ、お互いの文化を高め合うことができたなら、とても素晴らしいことだと感じました。日系移民の歴史については、当時の経験者の方からお話を伺うことができ、自分が予想していたものよりも深く学ぶことができました。計3回それぞれのお話を聞いて感じたことは、日本人が親しみやすい今のハワイは、日系移民1世2世の非常に大きな苦労や努力の上に成り立っているということです。私は、このことは忘れてはいけなそうと思いました。そして、すべての日本人はこの日系移民の歴史を知るべきだと思いました。しかし私は、お話を聞くなかで、当時の経験者の方や日本ハワイ文化センターの方が日系移民のみで作った軍隊の軍事成果を自慢げに話す印象を受けたことに疑問を感じました。確かに、日系移民の軍隊が戦地で成し遂げたことは偉大なことなのかもしれませんが、戦争はあってはならないことです。また、当時の日系移民は、自分たちが生き残るためにアメリカ政府に信用してもらうため必死で行った結果だと思うので、それを自慢げに話すのは違うのではないかと思います。しかし、戦争のことも含めて、日系移民の歴史について語り継いでいくことはとても重要なことだと思いました。

次に生活面や人と人との文化の違いについてです。3週間ハワイで生活をして、日常生活のなかでもさまざまな文化の違いを知ることができました。日本では、昨年からの税抜き表示になりましたが、ハワイでは以前から税抜き表示であること、買い物のレジでは、自分で商品をベルトコンベアーの上に置くなど、自国では当たり前なのが他国ではそうではないことに気づかされました。また、滞在中に2回バスケットボールの試合の観戦をしました。私は、応援の雰囲気や日本と違うと感じました。点が入ったときの盛り上がり方が日本と比べて非常に歓喜の音が大きく、盛り上がるのです。私は、これは自分の感情を豊かに表に出すアメリカ人ならではのと思いました。私は、英語のクラスの先生から教わったことなかで、非常に良いと思った文化があります。それは、アメリカでは、友人と会ったらその場に自分と一緒にいた友人を相手に紹介するという文化です。実際に、前日にアイスクリームのお店で知り合ったハワイ大学の学生を次の日偶然見かけ、声をかけたところ、その学生と一緒にいた友人を私たちに紹介してくれました。私は、本当に紹介するのだという驚きと、こうして人間関係を広く構築することができるのは、とても素晴らしいことだと思いました。自分が苦労した点については、会話の

文化の違いです。誰かと会話する際に、日本には聞く文化があり、多少は黙って聞いていても許されますが、アメリカでは相互に会話をするため、自分からも意見や考えを話さなければいけない点が難しかったです。また、英語の会話は、日本語と比べテンポが早く、話を聞くだけで精一杯ということが多かったのです。単に英語力不足という理由もありますが、私は自分自身が受け身であるという点が1番の理由だと思いました。日本でも、これからは自分から積極的に話していきたいです。このように文化の違いは多々ありますが、インターチェンジでの好きなことの話のときに、食べることや寝ることが好きな日常生活の好みは世界共通なのだと感じました。私は、インターチェンジや交流会などで現地の学生と交流するなかで気づいたことがあります。それは、お互いの共通項目を見つける難しさです。同じ趣味を持っていても、例えば音楽ならJ-POPなど自国の歌手が好きなどでジャンルが分かれてしまうと、そこから話を展開するのは難しくなります。しかし私は、まず日本で初めて合う人と会話する際に共通項目を考えたことがないと思いました。今までは、同じ講義を受けているからや同じサークルに入っていることをきっかけに仲良くなることのできたと思うからです。ですが、以前に大正大学の授業で外部の学生のお話を聞いた際に、人間関係を構築するときにはお互いの共通項目を見つけることが大切であると聞きました。私は、共通項目を見つけるためには、自分自身の経験や知識を豊かにする必要があります。私は、自分自身の内面を磨き、日本や海外を問わず、会話のなかでお互いの共通項目を見つけて、豊かな人間関係を築いていきたいです。

私は、この研修中に自分自身のことで気づいたことがあります。日本にいるときは、授業や課題、アルバイトなどで時間に追われることが多かったのですが、研修期間中は自由時間が多くあり、私は自分自身と向き合うことができました。そのなかで私が気づいた点は、自分は遠慮しがちでそれゆえチャンスを逃している点と、照れ屋でそれによって他人に対して心を閉じている点です。英語のクラスの先生が最初の頃の授業で、「Open your mind」「Don't be shy」という2つの言葉を話してくれました。この2つの言葉は、研修期間中、私の背中を押してくれました。研修を終えて、私は以前より少し積極的になれたのではないかと思います。

私は、同じグループのメンバーと3週間共に行動しました。時には、自分の夢や目標を語り合うことができました。私は、夢を語り合い、自分自身を向上させることができる機会を得ることができるのは、とても幸せなことだと思っています。私は、今まではチャイルド・ライフ・スペシャリストになるために留学したいと考えていましたが、研修を終えて、そのためだけではなくもっと海外の大学で勉強をしたいと思いました。日本とは違う学生が主体の授業で自分自身を向上させたいと強く思いました。

私は、今回の語学研修に参加し貴重な経験を得ることができました。新たな仲間や目標を見つけることができ、語学研修に参加することができて本当に良かったです。



私は、今回のハワイ大学春期集中講座、今後の英語学習のモチベーションを向上させるために参加した。もちろん英語学習のモチベーションも向上させることもできたと実感している、それ以上に多くの文化的相違点や価値観の違い、人間性の違いなど日本にいた時には学ぶことができない体験をすることができ、私が思っていた以上のことを学ぶことができた。

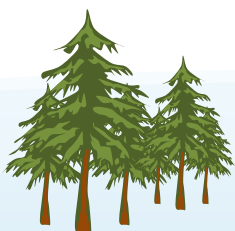
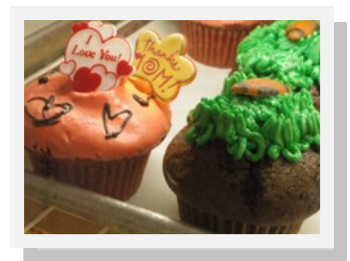
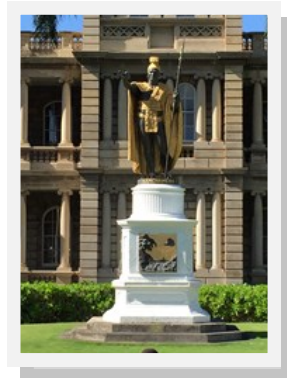
まず、ハワイでの生活の中で大きく感じたことは、現地の人々が日本と違い、明るく、積極的なコミュニケーションをとっていると感じたことだ。インターチェンジの際には、私とインターチェンジで話したハワイ大学の学生の方々は全員明るく、フレンドリーであった。日本では、初対面の人と話す際には、お互いに緊張することも多く、話が盛り上がらないことや沈黙ができてしまうことが多い、しかし、ハワイでは初対面の人と話す際であっても、明るく、気兼ねなく、初めてあった人ではないかのようにお互いが話していた。バスの中では、ハワイ大学の生徒が日本語で話しかけてきたことがあった。日本ではバスの中で見知らぬ人に声をかけることはまずないことだろう。しかし、話しかけてきた学生は、明るく、私たちに日本語まじりの英語で話し、少しだが英語を教えてくれた。また、ハワイ大学構内のジムで私と友人がバスケットボールをやっていると、私たちを仲間に入れてゲームと一緒にさせてくれた。バスケットボール初心者私たちはチームの足を引っ張ることばかりであったが、笑顔で「Don't worry」など、言ってくれたことにとっても優しさを感じることができた。私は人見知りであり、あまり自分から話しかけたりすることができない。しかし、これらの体験を通して、私はもっと積極的なコミュニケーションをしようと思った。

次に、日本の大学での講義と、ハワイ大学での講義のスタイルの違いを感じた。日本の大学では、先生が講義を一人で進め、生徒は先生の話や黒板に書かれたものをノートに書きあまり質問などはしない。しかし、ハワイでの講義では生徒の授業への積極的な参加が求められた。先生方は講義のうち講義の3分の1程度の時間を質問のための時間として当てていた。日本の大学では、授業が終わってから自発的に先生に質問していかなければならないが、ハワイ大学では、講義時間内に質問の時間を設け、生徒の疑問の解消を図り、その疑問点を生徒全員で共有させていた。また、授業の前に教科書の指定されたページを読み質問に答えるという事前学習の課題も出された。日本の大学では予習復習などは先生が言うものではなく生徒が自発的に行うものであり、先生の方から言うこともない。しかし、ハワイ大学では事前に行う予習と課題などを出しており、生徒の学習を手助けしているように感じた。ハワイでの授業の経験から、私はもっと積極的な授業への参加と発言をしていかなければならないと感じた。そして、予習復習などにも力を入れ、学習意識の高いハワイ大学の生徒のようになりたいと思った。

最後に日系移民の歴史を学び、今、私たちがこのようにハワイに留学することができ、平和に生活できたのは、ハワイに移住してきた日系移民の方々がさまざまな努力をされたからだということがわかり、感謝したいと思った。また、アメリカ本土では未だに日系人であることに依る差別や偏見などを持たれているようである。しかし、ハワイではそういうことがほとんどない。それは、太平洋戦争の際に日系人たちによる442連隊と言われる、陸軍の隊がヨーロッパでの戦いで大きな功績を上げ、アメリカの勝利に大きく貢献したことなどが大きな要因とされている。日系人たちは日本人でもあるが、同時にハワイで生まれ育った日系二世の方々の方々の苦悩があり、最終的にはアメリカの国のために働こうと決意された、このことに私は強い覚悟があるように感じた。日本人の血が流れているにもかかわらず、自分の国と戦わなければならない葛藤は計り知れないほど苦しいものであった

だろう。このような苦しみに耐え、生活したおかげで今の私たちの生活があることを学んだ。

私はこのハワイ大学語学研修に参加し、多くのことを学び、人間的にも大きく変わることができた。このような機会を与えていただいたことに本当に感謝したい。今回は3週間と短い機関であったが、この経験を今後の日本での生活に役立てていきたい。



今回、私がこのハワイ大学語学研修への参加を決意したのは、3つの理由がある。

第一に、私は日本語や日本文化について学んでいきたいと考えている。日本独特の文化には多くの魅力が詰まっており、特に日本語の美しさには心奪われるものがある。それらをより深く感じたいと思ったことがきっかけの一つだ。そこでさらに興味を持ったのが、「海外から見た日本」という分野である。海外文化を学びつつそれと比較することで、自国を知る良い機会になるといったことも大きい動機だ。

第二に、英語力の向上という目的である。高い英語力を身に付けることで、現代のニーズに応えられるだけでなく、世界に向けての視野が広がることを確信しているからだ。

そして最後に、自身の性格改善という目的が挙げられる。私は、自分に自信が持てる要素など一切ないと感じ、前向きな思考を持っていなかった。行動しようにもすぐに迷いが生じてしまい、選択することから逃げてしまうような人間だった。そんな自分を変えようと、打開策として見出したのがこの語学研修である。目的を設定することの重要性を身に付け、参加を決意しただけでも相当な進歩であったが、何もかも自分で決める環境に行くことで、ここから自分はさらに変わっていけると確信していた。それほどこの研修には大きい収穫を期待していた。

ここでは、以上の観点から私が得たことを記していく。

我々27名の留学生は、AとB二つのグループに分かれて授業を受けることになり、私はBグループに振り分けられた。海外での授業を受けたことで、日本との大きな違いに気づかされることになる。日本では、教師の講義を一方的に受け入れるだけであり、生徒からの意見発表や議論が行われることは目立たない。だが、“Don't be shy!”のモットーの下、現地での授業は驚くほど積極的であり、担当の先生は生徒の意見に真剣に耳を傾け、それを否定することなく受け入れてくれた。初めは奥手であった我々も、教師が我々を理解しこの姿勢を続けてくれていたおかげで、最後にはめまぐるしい発言を遂げることができた。配布されるプリントを使いながら英文法や表現、単語を習ったり、それらに則ったテーマを決めてクラスの人たちと英語で会話したりと、授業内容も充実していた。先生が自ら雑談や笑い話をしてくれることも多く、教室内は常に柔らかな雰囲気や包まれていた。

ハワイ文化を学ぶ授業では、ハワイに伝わる神のことや歴史を教わった。驚いたのは、日本に存在する考えであるアニミズムが、ハワイでも根付いているということだ。他にも宗教に関しての風潮や自然と神の結びつきの強さなど、ハワイの新たな一面を発見した。

また、授業の一環として設けられていたインターチェンジでは、ハワイ大学の生徒と交流をすることができた。所属する学部についての話題や、それぞれの自己紹介、中には日本語を巧みに操ることができる人もおり、日本について語り合うこともあった。全員それぞれ学んでいる分野は違ったが、来日経験のある人や日本食が好きという人がほとんどで、日本文化の広がりや、身を持って実感した。そのうえ、授業とは別に学内で行われていた学生交流会にて、さらに幅広く深い交流をすることができた。

この研修ではハワイ文化に触れる機会も多く用意されており、研修前のハワイのイメージを大きく変えることとなった。カルチュラルセンターでは、日本からハワイに渡った「日系人」の歩みを、多くの資料を通して痛感した。渡航には壮絶な理由があり、ハワイで想像を絶する日々を過ごしていたという。戦争や貧困などは遠くなった現在の日本だが、先人たちが築いてきた歴史があるからこそ、今の私たちがいるということを忘れては

いけないと胸に刻んだ。さらに、個人で真珠湾にも訪れた。領内はとても静か且つ厳かな雰囲気であり、歴史の重みを肌で感じた。本物の戦艦ミズーリや魚雷、砲台、武器、軍服などの当時の資料がそのまま残されており、戦争について改めて考えるようになった。グループごとに分かれ、各先生がワイキキ市内を案内してくれたこともあり、Bグループはハワイの伝統的な楽器であるウクレレの弾き方を教わった。全員で弾むような独特の音色を室内に響かせ、講師の方は明るく陽気な歌と演奏を披露してくれた。そして、アメリカ文化の一つとして根強いバスケットボールの試合も観に行った。大学内に大きな会場があり、そこでハワイ大学と相手校の試合が行われるのだ。私はスポーツ観戦をしたことがなく、実質これが初めてだったが、生の競技の迫力と会場の一体感言葉にし難い感動を与えてくれた。海外らしいと思ったのは、試合休憩時間などの空き時間に、チアリーディングの演技や、客席に向けての映像イベントなどの、様々なパフォーマンスが行われたことである。派手な演出や娯楽を好む国だからその空き時間の有効活用法であり、我々も周囲と一体になって存分に楽しんだ。屋にはファーマーズマーケットという大規模な市場に出かけたり、ダイヤモンドヘッドに登ったりなど、地域や自然に触れる機会も数多くあった。

ハワイ文化だけでなく、日本文化をより深く味わう貴重な体験もした。ハワイにある天台宗ハワイ別院と浄土宗別院に行き、読経をしたことだ。異国風だが微かに漂う日本らしさを携えた寺院には親近感を覚え、一時ハワイにいることを忘れてしまったりした。仏教は我々には馴染み深い存在だが、知らないことも多々あり、目を向け直す必要性を感じた。

勉強だけでなく休息も与えられ、空き時間には、アラモアナショッピングセンターやウォルマートなどといった大型ショッピングセンターに買い物に行ったり、ハワイ名物の食べ物や飲み物を味わえる店を探したり、ビーチで泳いだりといった楽しみも満喫した。清算時の英語の聞き取りやチップ制度に戸惑うこともあったが、ハワイの環境に馴染むための良い訓練となった。

そして、これらの素晴らしい日々も終わりに近づき、ついに卒業することになる。引率して下さった桜井先生は、卒業式の壇上スピーチにて「この研修に来ていなかったらあなたたちはこの2月、何をしていたと思いますか」と言った。情けなく感じるが、私は「何もしなかった」と断言できる。自ら進んで行動するような人間でなかったからだ。今でこそ言えることだが、この研修への参加を諦めていたら大変後悔していたらうし、何も変わらないまま大人になっていった可能性を考えただけで胸が痛む。改めて、この研修に参加して良かったと心から思う。まだ大学生活は多く残っているが、その残り日数の事を入れても、この研修での日々を超える思い出は作れないと誇れるほどに幸せな時間だった。

ハワイ大学を卒業したあの日、私はBグループの先生に“Commencement”の言葉を贈った。これは、「卒業」という意味の他、「始まり」の意味も持つ言葉でもある。私は、ハワイ大学を卒業したことを、ただの「卒業」とは思わない。卒業し、研修を終えたことは「終わり」を示すのではなく、「始まり」を意味するのだと知った。ようやく自分は、自分が目指すスタート地点に立てたのだ。この研修を通して得たものを、これからの人生で生かしていくことだろう。我々はここから始めていく



今回、ハワイ大学集中講座に参加して、私は多くの体験をした。私は、海外に行ったことがなく、日本と他の国を比較したことがなかった。そのため、今回の語学研修は、日本を客観的に感じるためのいい機会になった。以下では、私が、実際に体験した経験したことについて述べてい

第一に、ハワイの言語には、しっかりとした意味があり、温かい言語だと感じた。私は、これまで有名な「Aloha」という言葉でさえ、使い方や意味を知らなかった。しかし、今回、現地に行き、ハワイ語に触れたことで、日本にとっての方言に似ていて、親しみを持つことができた。例えば、「Aloha」は、感謝や歓迎、挨拶といった幅広い意味を持っている。また、「Alo」と「ha」で構成されており、「Alo」は、「Front of face」、「ha」は、「Breathe of life」という意味がある。このことから、私は、相手と会話することは、呼吸と同じくらい大切だと解釈した。会話することがなかったら、言語もなかった。だからこそ、今後、言語は、私たちが生活していく上で、最も重要な手段だと感じた。加えて、日本の方言とハワイの言語のように、一定の地域でしか使われていない言葉は、その地域の人たちが大事にしてきた言葉だと改めて考えさせられた。現在、日本では、方言が失われつつあるように感じている。このことを、問題視する必要があるのではないかと思った。その地域で生まれた言葉をハワイのように大事にした

第二に、日系移民についてだ。今回の語学研修では、日系移民について考える機会が多かった。例えば、台宗ハワイ別院の荒先生の話や「Japanese Culture Center of Hawaii」での話があった。これまで、日系移民に関心がなく、学んだこともなかったの

で、日系移民がどのようにして生活をしてきたのか想像もつかなかった。しかし、私たちが今回、ハワイで語学研修を行えたことも、ハワイの人が、日本人に優しいことも、日系移民が地位を確立したことに繋がっていた。私が、特に興味を持ったことは、100大隊や442連隊として戦った日系移民についてだ。この二つは、日本人だけで構成されている。また、日本とは直接対決をせず、ヨーロッパに派遣された。この人たちの活躍が、ハワイでの日本人の味方を変えた。このことで、私は、もし、今回同じことが行われたら、日本国籍の人は、アメリカのために戦えるだろうか、また、自分が生まれた国と直接対決をしている国の味方をするのだろうかという疑問を持った。私は、味方になれないと思った。なぜなら、母国と戦っている国を応援したいと思わないからだ。だが、日系移民の人たちは、味方をするしか選択肢がなかった。当時の日系移民の気持ちを考えると、戦争は残酷なものだと改めて感じた。私たちは、このようなことを繰り返さないためにも、この戦争を今後、心の片隅に置いておく必要があると考えた。

第三に、ハワイ大学の学習環境についてだ。今回の語学研修では、ハワイ大学で授業を行った。大正大学の英語の授業とは違い、英語を話すことが中心の授業だった。ハワイ大学では、双方向型の授業が行われた。日本では、先生の話聞くだけの授業が多いので、双方向型の授業では、消極的になってしまった。しかし、日が経つにつれて、ロバート先生とコミュニケーションがとれるようになった。そのため、授業に行くことが楽しくなった。また、授業に、インターチェンジというハワイ大学の生徒と会話をする機会があった。そこでは、自己紹介をしたり、ハワイの有名な場所を聞いたりした。最初の頃は、緊張したため、自分から話の話題を作ることができなかった。しかし、もっと英語を話せるようになりたいと思い、自分から話をするようにしていた。英語を話すことは、もちろんのこと、英語を聞き取ることもできるようになった。

ハワイ大学の図書館へも行った。ハワイ大学には、主に二つの図書館があり、私は、「Sinclair Library」を活用した。そこには、多くの本が置いてあり、勉強しやすい環境であると思った。この図書館には、ベランダにも勉強できるスペースがあり、そこから、ダイヤモンドヘッドが見えた。すごく景色がきれいで、その景色を見ながら勉強することが好きでした。このことで、勉強する環境を整えることは、すごく大事だと感じた。また、勉強する環境により、勉強への意識も変わることを改めて感じた。写真は、ベランダの勉強スペースから撮ったものである。

第四に、ハワイの自然についてだ。まず、日本に比べて、海がきれいだと感じた。私は、ワイキキビーチ、アラモアナビーチ、カイルアビーチに行った。この中でも、一番景色がよかった海は、アラモアナビーチだ。なぜなら、他の二つは、ハワイを感じさせる海だったことに対して、アラモアナビーチは、どこか日本を感じさせる海だったからだ。また、日本とは対照的で、ごみがなくきれいな砂浜だった。そこで、日本人のマナーのなさを痛感した。日本は、海にも線路にも道端にもごみが見られる。これを、誰かが拾っていることに気付く必要があると思う。もう少し一人一人が意識することが重要だと感じた。写真は、アラモアナビーチである。

また、ダイヤモンドヘッドに登った。ダイヤモンドヘッドは、ハワイのシンボルであるため、観光客の人々が多かった。また、登山は、少し大変だった。しかし、頂上に着いたとき、そのことを忘れるくらいの景色が広がっていた。頂上からは、ワイキキビーチやハワイ大学を見ることができた。あの景色は、今も心に残っている。少し大変なことの後には、何かすごいことがあると改めて思った。あの景色は、ダイヤモンドヘッドに登った人にしか感じるができない。そのため、途中であきらめず登り切って本当に良かったと思った。私は、ハワイと言ったら、海だと思っていたので、ダイヤモンドヘッドは、私の考えを覆した。これからは、ハワイに行ったら、海だけではなく、ダイヤモンドヘッドにも訪れてほしいと友達や知人に紹介したい場所だ。写真は、ダイヤモンドヘッドの頂上から撮ったものである。

最後に、今回、ハワイという日本とは違う地域に行き、多くのことを学べる機会になった。本や映像だけでは、分からないハワイの良さを自分で感じられた。最初は、海外に行くことも抵抗があった。しかし、この語学研修を終え、今はすごく英語を学びたいと思う。また、ハワイだけでなく、多くの国を訪れたいという意欲が湧いた。日本にただでは分からない日本の良さもあることが分かった。実際、自分で見たり、聞いたりすることがすごく大事だと思った。加えて、海外に行くことで、自分の意識も変わると感じた。日本では、大学生はただ自分のやりたいことをし、勉強はその次という意識があると思う。しかし、海外で学ぶことによって、それは間違っていて、学ぶことは楽しいと感じることができた。そのため、これを機会に、自分のやりたいことを本気で学びたいと思った。本当にこの語学研修に参加してよかったと思う。この経験を今後の糧にした



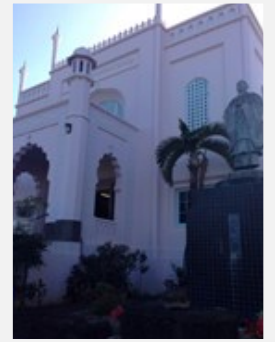
私は、ハワイでの留学を終えて、多くのことを経験することができたと思っています。勉強するだけでなく、現地の人と接したりすることで、アメリカ人の価値観についてなど肌で感じることも多く、日々考えさせられました。

留学をして分かったことの一つとして、すべての人が育ったその土地その土地に誇りを持っているという事でした。ハワイ大学の先生やハワイ出身ではない学生など、自分の生まれ育った場所について語っているときは、皆とても幸せそうでした。それは日系移民の方のお話を聞いたり、ハワイの歴史について学んだ時と同じことが言えました。アメリカに合併されるまで、王朝がどのようにしてハワイを守っていったのかという歴史を学ぶことで、ナショナリズムの大切さを知ることができました。ハワイに来た日系移民の人たちも同じようにして日本の文化を守り続けようという姿勢をさまざまな場面で感じるすることができました。日系移民の歴史の博物館では、日系一世の人たちがハワイの家でどのような生活をしてきたのかを見ることができました。家の中には神棚やタンスなど、ハワイで厳しい差別にあいながらも日本の文化を守ろうとしているように感じられました。またハワイの浄土宗では、教会のようにピアノを演奏したり、畳ではなく椅子に座って説法を聞くなど、その土地に根付いた仏教というものを見ることができました。そのようなことを学んで感じたことは、自分の国や土地の文化を大事にすることと同時に排他的にはならず、お互いの文化を尊重し合えるようになれば差別は生まれにくいという事です。日系移民の人たちが上手くハワイの文化と折り合いをつけながら自分たちの文化を守り抜いたように、自分たちの文化を大切にしながら尊重し合えば、その土地独自の文化を形成していくことが出来るのだと感じました。今も根強く残っている人種差別などの差別問題について考えさせられました。

もう一つハワイの人たちと接することで感じたことは、すべての人が自分の意見を持っているという事でした。英語の授業では、自己紹介をする機会があったのですが、私は何が好きで、どうして好きになったのかななどを説明する時に、言葉に詰まってしまう事が有りました。ですが、現地の人たちに同じような質問をすると、明確な自分の意見を持ち、自分はこういう人だと語れる人ばかりでした。英語の先生には、「話を途切れさせないように、自分から多くのことを話すことが大切だし、聞くことも大切だ。」ということを教わりました。それに関係しているのかは分かりませんが、自分の意見をしっかりと持っている人が多く、個性というものそれぞれちゃんと持っていたことに感銘を受けました。特に印象に残ったのは、私と年代の学生が自分の将来の夢について語ってくれた事でした。“自分は将来何になりたいから、今このような勉強をしている”ということを明確に話してくれて、まだ将来何になりたいか決まっていないうような曖昧な考えを持っている人には会いませんでした。私は将来何になりたいかという事が明確に決まっておらず、私の周りでもそのような意見の人が多いため、とくに問題だとも思いませんでした。ですが、ハワイ大学の学生が真剣に何かに取り組んでいる姿を見て、私も残りの大学生活、真剣に取り組まなければいけないと思えるようになりました。そして、自分の意見を持ち、ちゃんと自身を持って人に話すようになればいいなと思います。ハワイ大学には、日本の留学生や様々な国から来た留学生が多く在籍しており、年代でありながら、その行動力に驚かされました。

ですが、今回のハワイ大学の集中講座を終え、海外に出ることの恐怖心は無くなり、将来、海外で就職をしたり、留学をするという選択肢が一つ増えました。

海外を通して日本を見たことで、日本でしか出来ないことに気づき、今は出来ることから精一杯取り組んでいこうと思っています。留学を通して、海外での経験のみならず、客観的に日本を見ることができたり、様々な経験ができたと思っています。



私は2月7日から3月1日までの約3週間ハワイへ留学し、ハワイ大学マノア校でネイティブによる授業を行った。授業は月曜から金曜の8時30分から12時20分の約4時間、それ以外にも週に3回午後4時から1時間ハワイ文化のレクチャーを受けた。土曜日と日曜日には、天台宗などハワイにあるお寺を巡り礼拝をおこなった。他にも、カイルアビーチやダイヤモンドヘッドなど現地の観光名所にも足を運んだ。

海外を訪れるのは今回で2回目なのだが、1か月という長期は初めてだった。そして、初めてのハワイということもあり、驚きを感じたことは多くあった。まず、日本語を話せる人が多くいたことだ。ハワイでは日系の人がいるというのもあるが、ここまで日本語を話せる人がいるとは思っていなかった。多くの店や観光地で、かたことではあるが日本語で話しかけられたことが何度かあった。インターチェンジというハワイ大学の学生と交流するプログラムがあるのだが、その中にも日本語を勉強しており、日本語を話せる学生がいた。もちろんプログラム中は英語オンリーだが、終わった後は日本語で挨拶してくれた。彼らに家族について話を聞いたところ、祖父母も両親も日系人だが、日本語を話せるのは自分だけだと言っていた。顔は日本人、しかし中身は完全なアメリカ人なのと思った。ハワイの歴史についてのレクチャーでも、日系人の話が出てきた。日系移民はハワイに大きな影響を与えている。まだ戦争があった時代、日系人がとても活躍したと聞いた。もちろんいい話ばかりではない。出稼ぎとしてハワイに来た日本人の苦勞、差別、多くの問題を乗り越えてきたことで、今私たちが安心して留学に行くことができるのだと実感した。ハワイは危険な場所ではない。多くの人々がハワイに対してそのように感じているのは、日系移民の人々の苦勞があったからなのだと改めて思い知らされた。

ハワイの気候は常に暖かく、過ごしやすかった。もちろん大学内も学生が多く利用するスターバックスやジャンパジュース、スポーツジムなど学生にとって過ごしやすい設備があった。多くの学生が空いた時間を有意義に過ごしており、他にも購買や食堂の周りに座れる場所がたくさんあった。ハワイの学生は、空いた時間に一人で勉強している人が多く、その人たちのためなのか、スターバックスの近くや外にもベンチや机などがあり、座って勉強できるスペースがとても多くあった。もちろん授業以外の空き時間は、一人で勉強に励む学生だけではなく、グループで固まって会話を楽しむ学生もいた。彼らは、男子や女子だけで固まっているのではなく、男女混合でいるグループが多かった。日本では男子と女子とで別れているグループが多く、授業や休み時間も一緒に固まっているところは見たことがない。ハワイでは男女関係なく一緒に過ごしている。それを見て、些細なことではあるが、日本との違いを感じた。

ハワイの街を歩いて日本との違いに何度か驚かされた。日本と外国では違いがあっても同然なのだが、文化だけでなく考え方や習慣が違うのだと思った。私たちは予定の中に現地映画を見ることがあった。もちろん吹き替えなしの英語で見たので内容は完璧に理解はできなかった。しかし、問題はそこではなかった。日本で映画館といえば、友人と来ていてもあまり話さず、静かにみるものだが、ハワイでは、ハッピーなシーンや面白いシーンであれば、声を出して笑い、拍手もする。私は、映画を見ているときいきなり笑い出す外国人に何度も驚いてしまった。ラストシーンで主人公が目標を達成した瞬間が一番盛り上がっていた。映画を静かにみる文化の私たちにとって、それは新鮮なものだ。もし、これが日本であつたらそれはマナー違反になってしまうだろう。

日本では、交通機関が整っており、バスや電車など利用しやすくなっている。しかし、ハワイでは電車はなく多くの移動はバスか車、学生の多くは自転車ではなくスケートボードを利用している人が多かった。ハワイで私たちは、ほとんどの移動にバスを利用したのだが、その時システムの違いに驚かされた。目的の場所に着いた合図を日本ではボタンで運転手に知らせるが、ハワイではひもを引く。はじめのころはそのひもを引いていいものか、引いて気が付いてもらえているのかわからずなかなか引くことができなかった。そして日本と違い、とても揺れる車内で、立っていることは困難だった。さらに、座っている人たちにも日本との違いがあった。日本では相席はあまり好まず、知り合い同士で座る。一人で見知らぬ人と二人で座ることは全くしないとは言わないが、あまりしない。しかしハワイでは、日本人の私が一人で座っていても相席を気にせず座ってきた。神経質な日本人と外国人との違いなのだろうかと思った。もちろんバス内では日本との違いばかりではない。ハワイのバスにも優先席はあり、お年寄りや子供連れの人が乗車してくると皆快く席を譲る。日本も外国も親切にすることはどこも同じなのだ。



私たちは、3週間、ハワイで多くのことを学んだ。ハワイの歴史やハワイにおいての宗教観、そしてなにより、一番重要なことである言語とコミュニケーション能力だ。さらに、授業の一環として観光物を拝見することや、観光することにより自然にも触れ、ハワイを体感した。これらの詳細について以下に述べる。

まず、ハワイ大学で学んだことが、私にとって一番の糧となった。大学の授業では、ネイティブの教師や在学中の生徒とコミュニケーションをとった。私は、海外研修以前、リスニング能力や英語によるコミュニケーション能力が他人よりも劣っていた。しかし、実際に、国際交流をしたことで、それらの能力をたかめることができた。国際交流では、1対1でネイティブの学生と会話をすることもあったため、私たちにとって、とても貴重な時間となった。さらに、ネイティブの教師が、とても親切であったため私たちは、安心して楽しく受講することができた。また、間違えることを恐れる、という感情からくる羞恥心を打ち砕くことができた。この羞恥心を忘れることなく、今後の授業にも活かしていきたいと考える。

次に、私たちが学んだハワイの文化についての考えを以下に示す。私は、この海外研修をする以前までは、ハワイは楽観的なところという考えのみであった。だが、ハワイの文化について学んだからは、その考えは一転した。なぜならば、ハワイが現在のように日本人を受け入れる場所になったのは、大勢の犠牲があったと知り得たからだ。明治元年、ハワイへ働きに出た日系移民が、442連隊として戦争に加わり、600人の犠牲を出した。しかし、彼らがアメリカ兵を救出したことにより、現在の安全なハワイがあることを学び、私は感銘を受けた。この歴史があるからこそ、私たちは、安心してハワイで勉学に励むことができたのだと実感した。

そして、ハワイでは勉学だけでなく、日本との文化の違いについても多く学んだ。その3つの例を以下に述べる。

第一に、私は、食文化の違いに驚かされた。ハワイでは日本と比べ、皿の大きさや食事の量が大幅に異なっていた。朝食から糖分を多く含むものを食することも多々あった。また、ハワイでは、箸を使用する機会が少なかった。加えて、ハワイで外食をした際、レストランはもちろんのことフードコートでの料金が、日本と比べ、多少高額であった。

第二に、町並みや交通に関して、日本とは異なる場面があった。大きく異なっていたことは、車道の方向が、日本とは正反対であったことやバスが数十分に一度来るということである。さらに、私は、バスの乗車中において苦労したことがあった。それは、ハワイのバスにおいて下車する際、窓に掛かっている紐のようなものを引かなくてはならない。しかし、私は、初めてバスを利用した際、そのことについて理解できなかった。やはり、自動車やバスの機能は異なっているのだと理解した。

最後に、アメリカ人との考え方の異なりについて以下に示す。私たちが、授業においてハワイ大学在学中の生徒と交流した際に、主張されたことがある。アメリカ人から見ると日本人は、消極的に考えられるということだ。日本人は、比較的他人の目を気にする思考があり、消極的になりがちだ。そのため、コミュニケーションをとることに苦労する。海外交流をしている際、私たちは、何度も「Don't be shy.」と言われた。一方で、アメリカ人は、多くの人々が周りの目を気にすることなく、独自の個性を活かし考えを明確に主張することができる。私は、アメリカ人のそういう面を見習わなくてはならないと考える。さらに、日本人は、学生に限らず、男女別に別れる習性がある。これに対し、アメリカ人は、男女混合に仲がよく、集団で歩いている姿や食事をする姿を多々拝見することがあった。

以上のことから私たちは、ハワイの文化や習慣、価値観などを学んだ。私たちは、海外研修をすることで多くの苦労もあったが、学習能力やコミュニケーション能力を高めることができた。その上、観光や見学によりハワイを体感し、ネイティブの人に伝えたいことが明確に通じ合ったことの喜びにより、英語を学ぶ楽しさやモチベーションを高めることができた。これらのことを将来や今後の授業に繋げていきたい、と私は考える。



私がハワイ語学研修に参加してみて感じたことがいくつかあります。まず1つ目は、ハワイ大学に在学している生徒は皆将来の目標や自分の意見がはっきりしていることです。今回インターチェンジとゆう在學生と交流し話し合う授業がありました。そこで何を勉強しているかなどを聞いたところ、しっかりした夢がありそれに向かって勉強している方が多かったです。また、インターチェンジを経験してみてもっと自分の言いたいことがはっきり英語で伝えられるようになりたいと強く思いました。インターチェンジで苦戦したことはうまく伝えられないということもありましたが、他にももう一回聞きたい、言ってほしい英語の会話についてもう一度言って下さいや、ゆっくり言って下さいなどの応答ができなかったこともあります。ある日バスを待っていたところ、一人の在學生に話しかけられ、その学生は日本語を専攻している方でした。彼は私たちに英語で話しかけましたが、所々聞き取れない会話があり私たちが黙っていると彼は紙を出し英語を書きだしました。そして渡されたのは英語が聞き取れなかったとき何で英語で言うかを日本語と英語両方で書いてありました。彼は私たちに英語が聞き取れなかった場合は相手にそれをちゃんと伝えた方がいい、それもコミュニケーションだと教えてくれました。そのことを聞いて私は相手の言っていることが分からないまま聞き流すのではなく、相手に分からないとははっきり言うことは大事だと感じました。

2つ目は、ハワイの歴史、文化は大切に残されていることです。私たちは今回ダウンタウンに行きたくさんの今でも残されている建物や場所に行きました。さらに、ハワイ日本文化センターに行き昔のハワイ島における収容所の発見から復活までについての歴史を学びました。今でも大切に残されていた物がたくさんあり感激しました。ハワイに今でも住んでいる荒先生のお話もとても印象に残っています。日本人がどのようにしてハワイ人（アメリカ人）になったのかなど、昔ハワイに住んでいた日本人の苦勞や生き様について聞き、貴重なお話だったなと今でも思います。3つ目は、日本と違う点があることです。大学内を見て回ると在學生は皆PCを持ち歩き、ベンチやテーブルやテラスなどで勉強や課題をしている様子が多く見られました。日本の大学内は学食に行っても食べているかお話ししていることが多いと思います。しかし、ハワイ大学の学生はご飯を食べながらも勉強をしている生徒が多かったです。交通面では地下鉄がないことが日本と違いました。ハワイではバスや車が多く見られました。学生は自転車、スケートボードが多く見受けられました。飲食店やスーパーなどで1つ感じたことがあります。それは、店員さんとお客さんが仲良く話していることが多いということです。私がレジに並んでいたところなかなかレジの順番が回ってこないなと思って前を見てみたところ、店員さんとお客さんが長い間よく喋っていました。その光景は日本では見ることができないなと思いました。これこそがハワイアン・タイムだと実感しました。さらに、バスの時間も来る時間にぴったりには到着していませんでした。日本のバスは降りる際ボタンを押して運転手に知らせますが、ハワイのバスは紐を引っ張っていました。昔からあるやり方を今でも続けているのだと実感しました。日本と同じ点で言うと、お年寄りにはちゃんと席を譲ってあげ、降りる際ドアが閉まってしまったとき周りの乗っている人たちがドアを開けてと運転手さんに知らせている光景を見て親切だなと感じました。そして、平日授業に参加しました。先生はハワイ大学のネイティブの先生だったこともあり、英語を必死にしゃべらなければいけないと強く感じました。休日の内容、インターチェンジの感想などを先生に伝える時とても苦戦したことを覚えています。1つの発音が相手に伝わらなるとすべて伝わらず苦戦しました。RとLの発音や、和製英語など日本では伝わっていたことでも、ハワイでは全く通じず何回も同じ単語を言ったことも覚えています。教科書を読むスピードも早くて自分はまだまだ勉強が足りないと感じることが多かったので、日本に帰ってから英語の勉強をしなければならないと強く思いました。この研修に参加して私はよかったなと思います。英語をもっとできるようになりもっとコミュニケーションをとれるようになりたいと思ったし、他の人より英語ができるようになりましたと強く思うようになりました。さらに日本と外国の違い、文化などもよく知ることができてよかったです。



私は、今回の語学研修が初めての留学でした。ハワイは日本人の観光客にも人気ですが、ハワイの歴史については詳しく知りませんでした。今回ハワイ浄土宗別院、天台宗別院、ハワイ日本文化センターなどに行きハワイの歴史について聞かせていただき、現在のような観光客が訪れやすく観光しやすいハワイになるまでには悲しい歴史があったことも知れて良かったです。ハワイの日系人の始まりは、日本からハワイのサトウキビ畑の労働力として送られた150人の移民からでした。ハワイでの労働は楽ではなく厳しい暑さと長時間の労働で日本に帰ってしまう人も多くいたなか残った人が今の日系人の始まりのようです。戦争でも日系人の部隊はとても活躍しましたが、その犠牲者はアメリカ陸軍の歴史で最も多く終戦時には4分の1しか残らなかったようです。そして、ハワイでの宗教はこのような移民の過酷な労働で荒っぽくなりお酒や賭け事にはしる人も多かったがそれを落ち着かせるため宗教が発達していったそうです。ハワイ浄土宗の日曜礼拝に参加してお経を英語で読んだり英語の歌を歌ったり伴奏がオルガンだったりなど宗教もその土地にあった形で変化していつているからこそ長くその地に根付いているのだと感じました。

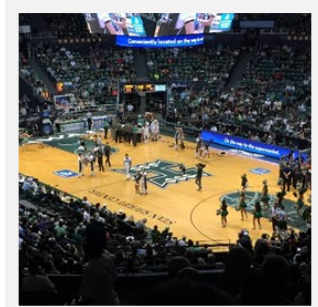
海外にでて感じたことは、日本だとバスなど交通機関は時間に正確にくるけれどハワイは時刻表より早く来たり遅く来たりなどとても時間にルーズだと感じました。ファーマーズマーケットも午前中しかやっておらずハワイならではだと感じました。そして、ハワイで一番日本人との違いを感じたのは、カフェなどで飲み物を注文したときなどに名前を聞かれカップに名前を書いてくれたり、動物園で質問した時なども快く名前を教えてくれてとてもフレンドリーだと感じました。日本人なら名前を教えてと言ったらなかなか教えてくれないか、変な人だと思われると思うので文化の違いを強く感じました。

ハワイの言語やポリネシアンも学びました。フラダンスも初めて踊りましたが振付一つ一つに意味があって両手を前に出す動作で愛を伝えたりなど歌詞を聞いてその場でおどることができるのがとてもおもしろいと興味がわきました。その他にも笛でご飯の時間に山にいる仲間を呼ぶ笛は音程や音の長さを手を使って変えてそれによって内容を伝えるというのはとてもよくできたシステムだと感じました。

ハワイの言語も学びましたが発音は日本語と似ていたので発音しやすく聞いたことのある単語も多かったので非常に楽しかったです。

ハワイ大学のバスケットチームの試合を観戦した際にハワイ大学のスタジアムだったのでアウェーのチームが点を入れたときや反則行為をすると会場のブーイング大きく日本人との違いを感じました。他にもハーフタイムにはスポンサーの会社のCMで大きな風船からクーポンが降ってきたりダンスをしたりなどハーフタイムも観客を楽しませる工夫がしてありスポーツ大国のアメリカならではの感じました。

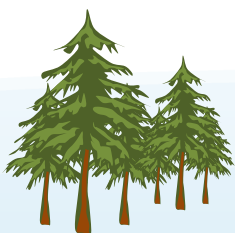
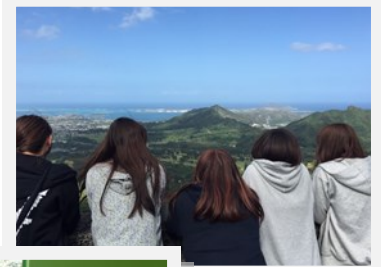
今回の語学研修では、普通にハワイに観光していたら経験できないことも多く経験しました。現在のハワイの平和には日本人の移民の方の差別や過酷な労働、戦争などがあることを日本人として知っておかなければならないと感じました。そして、ハワイを訪れたことのある人は多くいてもこのような歴史背景を知っている人は少ないと思うのでこれを機に少しでも多くの人に伝えていきたいと思いました。



ハワイ大学春季集中講座に参加して、非常に多くのことを学んだ。授業もそうだが、自由行動などでも学ぶことがあった。授業では、授業内の一環としてインターチェンジというものが行われた。大正大学の学生2人につき1人のハワイ大学の生徒が付き、決められた内容について質問したり、お互いの趣味や夢などを聞きあったりなどして、会話をするというものだ。このプログラムの参加者は27名である。2つのクラスに分けられた。Aクラスは13名、Bクラスは14名だ。私はAクラスだった。ハワイに到着して初めてのインターチェンジの日、Aクラスは奇数なので、必ず誰かが1人になる。その1人になったのが私だった。初日だったということもあり、緊張して自分の考えていることがまったく伝えることができなかった。そこで私は非常に悔しい思いをした。インターチェンジの人にも申し訳ないという気持ちでいっぱいになった。もっと英語を勉強して、日常会話が話せる程度になっていればと、ただただ後悔するばかりであった。しかし、1人でインターチェンジをしたことによって英語を勉強するにあたっての取り組み姿勢が、私の中で変化したと思う。悔しい思いをしたからこそ、もっと英語ができるようになりたい、成長したいと思えた。この経験がなかったら、今のまま成長できなかったと思う。これからもこの悔しさをバネにしてもっと英語力向上を目指していきたい。ハワイ大学に来て一番初めに言われたのは”Don't be shy”というフレーズだった。日本人は、多くの人がシャイで謙遜することが多い。そこが日本人のいいところでもあるが、外国では通用しない。インターチェンジでは、その価値観の違いも多く学んだ。また、自分たちで決めたお題でハワイ大学の学生に話しかけ、質問をするという内容もあった。日本だったら、知らない人に話しかけられたとき、ほとんどの人が怪訝そうな顔をして質問をされても断ってしまう人が多いだろう。しかし、私が現地の人に話しかけたときは、笑顔で丁寧に快く質問に答えてくれた。こういった場面も日本と海外の大きな差である。授業外の自由行動ではバスで移動する。そのバスも配慮がされていて、バス停に着くごとに人が乗降しやすいようにバスが傾けられる。日本も見習ってこのシステムを取り付けたほうが良いのではないかなと思う。

その他の授業内容は、ハワイの文化や歴史について学ぶものや、フラダンスを踊るといったものがあった。ハワイの文化については日本人移民の背景などを学んだ。ハワイにおける移民は、急増するサトウキビ畑や製糖工場で働く確保するため1830年頃より始められ、それ以降急激に数が増えていった。中国やポルトガル、ドイツ、ノルウェーなど様々な国から移民がハワイに来島したが、日本からやってきた移民が最も多かったそうだ。この多くの内容は、ハワイ日本文化センターの「おかげさまでツアー」に行つて学ぶことができた。フラダンスでは、実際に体を動かしたり、楽器を鳴らしてみたり、フラの時にはくハウスカートというものを着用してみたり非常に楽しい授業であった。フラはハワイの伝統的な歌舞音曲である。フラにはダンス、演奏、歌唱のすべてが含まれると聞いた。日本でも有名なフラは、心地よさそうな踊りにも見えるが、本来は神への畏敬の念をあらわす神聖な踊りとして誕生した。手や腰の動き、顔の表情によって言葉をあらわす全身を使った手話のようなものだと感じた。

このプログラムでハワイ語も学んだ。まず日本人でも多くの人が知っている「アロハ」だ。多くの人が「アロハ」＝「あいさつ」だと思っているのではないだろうか。しかし、「アロハ」には「さようなら」や「愛している」などたくさん意味がある。それ以外にも、「エコモマイ」(ようこそ)や「マハロ」(ありがとう)など多くのハワイ語を学んだ。これもこのプログラムで学んだことだ。この1ヶ月間ハワイに滞在して、日本とは違ういろいろな景色を見てきた。日本もハワイでは味わえない都会や田舎の風景を楽しめる。しかし、ハワイの自然豊かさ、海の綺麗さ、そしてなにより人の温かさを見ていて非常に痛感する。この1ヶ月間は、英語も人としてもおおいに私を成長させた。このプログラムに参加してよかったと心から思える。また機会があったら、私の英語力をもう少し向上させてから行きたいと思う。



私は三週間の語学留学を経て、自分自身が変わった点が二つある。

一つ目は、英語について見方が変わったことである。留学に行く前は英語を見ても積極的に読もうともせず自分から遠い存在だと感じていた。しかし、留学に行き毎日英語のみの授業を聞き、話すことで少しずつ耳が慣れていくことを実感できた。最初は先生が話している意味もわからず、自分の伝えたいことも言葉で伝えられず非常に落ち込んだ。その悔しさから、ドームに帰ってから毎日必死に勉強した。次の日、勉強した言葉で会話が伝わると非常に嬉しかった。そのような日々を繰り返しているうちに、だんだんと話している意味も理解できるようになり、伝えたい言葉がでてくるようになった。授業中のインターチェンジの時間では、わかる範囲の単語で話すことで会話は繋がるということを実感した。ジェスチャーや言い回しをして伝えたり、単語のみで伝わったり英語への難しさを軽減することができた。現地の人と話しかけることで、よく使われる単語や言葉も身近に知ることができた。日本に帰ってきてからの影響も大きい。留学前には気にかけていなかった、電車の英語のアナウンスや街中の標記の意味を考え、調べるようになった。映画を観る際は字幕を選び、洋楽を多く聴くようになり、私自身の生活が一転した。留学をして英語を学ぶことの楽しさを知り、英語への関心が非常に高まった。

二つ目は日本を外から見つめ直す機会ができ、視野が広がったことである。3週間という長い間海外で生活することは初めてだったので、ハワイとの違いから日本について見つめ直す機会になった。例えば、ハワイの映画館に行った際、席が自由であったり、興奮する場面では皆拍手をしたり、日本では見られない光景を見ることができた。バスケットボールの試合を観に行った際も、近くに知り合いがいたら、決まっている席を関係なく席をずれたり、同じチームを応援する同士で集まって一緒に応援したり、皆とてもフレンドリーであり、心の優しい方々であった。日本は、決まりがしっかりしていても住みやすいが、人が集まる場所では周りに気を使って生活している。また、持ち物や服装に関しても人それぞれ個性があり、決まりや目に見えなく自由に生活しているように感じた。日本には、流行や人に合わせる傾向が見えるが、人は人、自分は自分、とお互い理解しているようにみえた。街中にあるハワイの日本料理屋さんには「スモウ」や「サムライ」という名前が付けられていることが多く、ハワイから見た日本のイメージを知ることができた。味も美味しかったが、日本とは少し違った味付けだったため、日本にある海外料理の店の味も、現地ではまた違う味なのではないかと気づいた。ハワイで過ごすことで、日本との違いに直面し、それぞれの国のよさについて考えることができた。

また、ハワイの歴史について、荒先生からお話を聞き、後日ハワイ日本文化センターへ訪れた。現在の海や街中がきれいで観光地で大人気なハワイも、昔の戦争があって成り立っていること。日本人は日本より稼げるということを知りハワイに出稼ぎに来ていたこと。しかし、日本との気温や労働時間の違いにより、想像していたより辛かったが、ハワイで稼いでくると約束した責任感により日本に帰りづらい状況であったこと。今まで、知ることのなかったハワイの歴史について新しく知ることができた。きれいな観光地のハワイのイメージだけではなく、新しいハワイを知ることができた。

ハワイで過ごした日々は、毎日が非常に充実していた。英語への関心が上がったのはもちろん、海外で生活することの大変さを実感し、日本を見つめ直す時間が増えた。機会があれば、長期留学にも参加したいし、将来も英語に関わる職に就きたいと視野が広がった。この留学から新たに英語の勉強をスタートし、語学力を伸ばしていきたい。



3週間のプログラムを終え、今もなおハワイ大学での生活が忘れられないのはきっと私だけではないはずだ。日本で過ごす21日間と、ハワイで過ごした21日間は何もかもが異なり、それらの生活は私に大きく影響を与えた。

ハワイへ渡航するのは初めての経験であった。まず1番初めに感じたのは、日本との気候の違いである。2月の真冬の日本とは違い、ハワイは常夏だ。しかし思っていたよりも過ごしやすく、東京のような湿度の高いジメジメとした暑さは感じられなかった。そして私は初日からとても安心感を覚えたのだ。それは空港に降り立ったときから、ハワイの人々がとても親切にしてくれるからだ。ハワイの人々は日本人への対応に慣れている。また、予想していた通りどこへ足を運んでも日本人を見かけた。

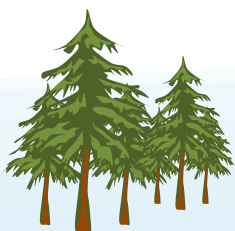
今でこそハワイは日本人に人気のある観光地だが、戦前の関係はどのようなものだったのか。今回のプログラムに参加しなければ知ることができなかったかもしれない。ハワイがアメリカに併合された頃、サトウキビやパイナップルの大農場が作られた。その労働力として、日本や中国、フィリピンなどから大量の移民を受け入れた。当時の日本は貧しい国だったため、職を求め多くの人々がハワイに移住した。最初は日本人移民は差別されていたのだ。単純な人種差別である。しかし日本人は真面目で勤勉であり、黙々と働き、貧しいながらも子供の教育に熱心であったため、立派な日系ハワイ市民が多く出た。第二次世界大戦では、アメリカ陸軍にハワイ出身の日系の若者を中心にした「第442連隊」という部隊が組織され、その部隊は大活躍をした。その結果、戦後のハワイでの日系人の地位は大変高くなったのだ。それらの日系人の活躍があるからこそ、今のハワイがあり、今の日系人がある。これらを知っているのといないのでは、ハワイへのイメージが大きく異なるはずだ。日系移民について学んだ上で生活できたことがとても良かった。

ハワイで食事をとり、自分の口に合わないと感じたものはあまりなかった。少しカロリーを気にする必要はあるかもしれないが、味はどれも食べやすい。そしてハワイアンフードは日本料理から影響を受けているものが多い。例えば、伝統料理の「ポケ」という食べ物は、醤油やごま油などの調味料で味付けされた一口大のマグロをご飯の上に盛り付けたものである。生魚を食べるのは日本の刺身文化が影響を与えたという。ハワイでは日本料理屋はもちろん、中華料理、韓国料理、タイ料理など多くの国の飲食店を見かけた。そして街を歩く人々を見てみると、地元の人や日本人をはじめ、様々な人種がみられる。そうしたことから、ハワイの人々は異国の食文化、そして人を受け入れるのが得意であると感じた。

大学の授業では英会話を中心として、そのほかにインターチェンジや課外授業で構成されていた。私は初日の授業から挫折をした。こんなにも喋れないものなのかと大変落ち込んだ。しかし同時に私は、相手を理解したい、そして自分の気持ちを伝えたいという強い気持ちも芽生えた。そして私は、大変いい先生に出会ったのである。どれぐらいの英語力を持っているかどうか、それももちろん大切である。しかし、英語力以前の問題である、英語を話すことへの「恥ずかしさ」や「間違う不安」を、その先生は一生懸命消してくれようとした。拙い英語をしっかりと聞き取ろうとしてくれる先生の姿に私は感動し、正しい英語を話そうとするのではなく、しっかりと目と目を合わせて伝えようとする態度を心掛けるようにした。

実践できる環境がその場にあると、英語を詰め込むのも楽しくなる。生活していくうちに、どんどん使えるフレーズや相槌が増えていくことで、英語で会話することに抵抗や恐怖心を感じなくなった。ハワイの人々の温かい人柄があってこそ、上達だ。

帰国した今思うことは、ここがスタートであるということだ。このプログラムをきっかけに、次のステップへと登り始めたい。素晴らしい環境の中で、素晴らしい人たちに囲まれ、英語力以上に大切なことを気づかせてくれた今回の経験は、私にとってこれからの人生を変えるターニングポイントであったと言っても過言ではない。今まではただ漠然と、これからの将来には英語が必須だと、そればかり考えていた。しかし今は、今回ハワイで出会った人たちのコミュニケーションツールとして、しっかりと英語を身につけたいと強く思う。英語を習得したい目的がとても具体化したため、より一層モチベーションが維持できるだろう。「英語」の見方を変えてくれた今回のプログラムに、心から感謝している。



今回のハワイ大学への留学という経験は私の人生を変えるものになりました。

私は今まで海外渡航の経験がなく、今回が初の海外経験となりました。最初は言語や文化の違い、普段とは全く違った生活を送ることに対しても不安を感じていました。ましてや今回は旅行で遊びに行くのとは違い大正大学のカリキュラムとして勉強しに行くと考えると重圧で押しつぶされそうでした。

しかし私は元々英語自体苦手だったので、英語力の劇的な上達は無理にしてもその苦手意識だけでも克服したいという事もあり今回のカリキュラムに参加することを決めました。

また、幸運にも同じサークルの後輩もこのカリキュラムに参加していたので寂しさや心細さはあまり感じなかったのはとても大きかったです。



そしていざハワイに到着すると、太陽の強烈な日差しを受け「とうとうハワイに来たんだな」という実感が湧いてきました。到着してしまうと不安よりも新しいことへの挑戦や今までにない体験へのワクワクの方が大きくなりました。

生まれて初めて家族と離れ、慣れない海外での生活。不安も勿論ありましたが一緒にこの留学に参加した仲間も一緒ならきっとうまくいくだろうと漠然とした期待もありました。

そして今三週間を振り返ると日本では決して体験できないことや、普通の旅行では絶対に経験できないことが沢山ありました。

ダイヤモンドヘッドに登り、ホノルル動物園を巡り、ハワイ大学で学ぶ。それらは一秒たりとも無駄な時間などなく三週間を満喫することが出来ました。

私が今回の三週間の中で特に印象的だったのが、大学のバスケットボールの試合です。

同じ大学生とは思えない選手たちが凄まじいプレイを魅せてくれたのですが、それ以上にその規模の大きさに驚かされました。日本では決して見る事の出来ない世界が広がっていました。何故大学の試合にたくさんのスポンサーが付き、充実したサービスが展開されるのか。そもそも何故ここまで盛り上がるのか。といった日本との違いだけでなく、その仕組みまで考えさせられました。



今回の留学でハワイに滞在した三週間は、私の人生をより豊かにしてくれることでしょう。また私もこの経験をより活かせる様に日々の生活に変化を表してみたいと思います。



大学の集中講座に参加し、2月にハワイを訪れた。様々なプログラムが組み込まれているが、主な目的は英語での会話力を付けることと日系移民の歴史を学ぶことである。初めてハワイを訪れたということもあり、学習したこと以外にも、景色や人柄についていろいろなことを感じた。

まずは町並み、環境面について述べたいと思う。ホノルル・ワイキキ周辺しか回っていないが、住宅街を見て、太陽光パネルを設置している家が多いと感じた。ハワイ大学でも図書館に広く設置されていた。1年を通して晴れが多い気候のハワイでは大きな効果が見られるだろう。ただ、ハワイ大学をはじめとする多くの建物で、かなり冷房が効いていた。建物の中と外でかなりの温度差があり、服装も迷うし体調に気をつけなければいけなかった。現地の人々は温度差をどう感じているのか、冷房の温度を何度に設定するのが良いと思っているのかなど聞いてみれば良かった。せっかく太陽光発電の利用が進んでいるのに冷房を使いすぎていては地球温暖化に対しても金銭面に対しても効果が見られなくなってしまふ。とてももったいないことである。もっと設定温度を上げたり、風量を弱めたりして、環境を意識した冷房の使い方をしてほしいと思った。

海は、ワイキキビーチ、アラモアナビーチ、カイルアビーチの3カ所へ行った。どこの海もとても澄んでいて、手前から透明・水色・青、そして空の青というようにきれいなグラデーションが視界いっぱいになり感動した。特にアラモアナビーチとカイルアビーチはあまり人がいなかったし、砂がさらさらしていてごみ一つなく、砂浜から気持ちよかった。たばこの吸い殻すらないというのは景観を徹底しているということであるのだろう。元がかなりきれいな状態だと現地の人でも観光客もごみを捨てにくくなり、その状態を保とうとするだろうし、掃除もしやすい。ワイキキ周辺はかなり人が多いためごみもあり、砂浜からきれいとは言いがたい。賑わっていてもきれいな状態を自然と作り出せることが重要であり、今後の課題になるのではないかと考える。

チャイナタウンに行く機会があり、路上生活者の多さに驚いた。ハワイのイメージに似合わず、道ばたに寝転がっている人、屋の広場で賭け事のようなことをしている人、浮浪者がいて近寄りたが、そのような人々に対してどのような政府は対応をしているのか、働ける場所も多そうなのに増えてく路上生活者を減らすために市民に出来ることは何かを考えていく必要がある

次に人柄について述べたいと思う。ハワイには日本人を受け入れてくれる雰囲気があり、挨拶程度の日本語を話せる人も多い。英語での注文がうまくいかずに時間がかかってしまい、店員をいらつかせ結局違うものが出てきたこともあったが、ほとんどのお店で、お互いに理解しようと伝え合いコミュニケーションをとることが出来た。また、30人でぞろぞろと道路を歩いていて向かい側に渡ろうとしたときなど、車が待ってくれた。場所にもよるが日本だったらクラクションを鳴らされるようなときでもハワイでは歩行者を優先させてくれて、おおらかな人が多いと感じた。大学内でも気さくに話しかけてくれる人もいて、知らない人とは関わろうとしない内向的な日本とは違い、外向的な人が多い。

今回参加して強く感じたことは、3つある。語学など勉強は続けることが大切だということ、ある程度の語学力を身につけたらどんどん話しかけたりしてコミュニケーションをとることが大切だということ、ハワイは歴史的背景をきちんと知った上で訪れるべき場所だということ、である。

英語は中学校から大学2年まで毎年授業があったが、最近2年間は全くといって良いほど英語に触れなかった。渡航する直前に英単語の本を見て覚えようとしたがあまり頭に入らず勉強不足のまま現地入りしてしまった。そのため、ハワイ大学での授業では英文法を扱ったが、懐かしいと思うばかりで進まなかったり、会話も文法がきちんと並べられず単語だけ発したりして、周りに頼ることが多かった。2年前までの方が、語学力があつたのではないかと思う。これからは洋画を観たり洋楽を聴いたりして少しずつでも英語に触れたり、TOEICの勉強をしてテストを受けたりしていこうと決意した。

多くの人とたくさん、いろいろな会話することで英会話力は身につけていくのだろうが、勇気が出ず自分からは減退に話しかけなかった。授業中も当てられたら答えるという姿勢で、自由時間は班員に頼ってしまったため、もったいないことをしたと反省する。しかしクラスの先生に何度も「恥ずかしがるな。声を出すことが大事だ。」と言われ、最後の週はたまに発言が出来、買い物をするときも単語ではなく文を言うように心がけた。また、5回ほど行われたインターチェンジの時間では、最初は用意されている質問項目を読み、答えになんとなくうなずいたり笑ったりするだけだったが、だんだん自分で考えて質問したり、答えで言っていることがわからなければそれは何なのか聞いたりして、インタビュー形式ではなく会話が出来るようになった。先生やインターチェンジ担当の学生がゆっくり話もしっかり聞き取ってくれたことが大きい。少しずつでも簡単な内容でも会話が出来るようになったと感じた。日本人同士でも自信がないからと会話をしないのは、つまらなくて沈黙が気まずいことがあるように、英語でも自信がなくて積極的にコミュニケーションをとっていくことで、楽しいと感じ、語学も身につけていくと感じた。

日系移民の歴史について今まで全然知らなかったが、ハワイは暖かくてのんびりして楽しい観光地というだけでなく、明治元年から官約移民や100大隊などの多くの犠牲や苦勞があつて、現在の関係が築けていることをきちんと知っておくべきだと感じた。生活するためにお金をもらうために家族を守るために、早朝からきつい労働環境を耐えて働き、戦争までした移民の気持ちなど、歴史を知るとハワイの見方が変わる。移民として行ったが一代で上院議員にまでなったダニエル井上さんなど、旧移民の努力のおかげで現在多くの日本人が自由にハワイに行き楽しめるということをお忘れてはいけない。

3週間も海外で生活することは初めてで、英語の習得やハワイの文化や歴史を知ることもちろん大きな意味をなし、成果を得られた。語学力に関しては反省点も多いため、決意を忘れず日本から出来ることをやってきたいと思う。それだけでなく、バスケットボールの試合観戦や大学での国際交流などを通して、楽しませるために何をしているのか、人を集めるためにどうしているのかなども自分なりに考えられた。同じ大正大学生とはいえ知り合ったばかりの人たちとほとんどの時間をともに過ごすことも大変ではあったが、様々な経験をしてきたようで様々な考えがあり、年下なのに具体的な夢や目標を持って頑張っている姿を見て、私も頑張ろうと思えた。良い経験となったこの3週間を忘れず、これからの生活に生かしていきたい。最後に、このプログラムを形成してくれた大正大学とハワイ大学の関わった先生方に深く感謝する。



私は、今回のハワイ大学での語学研修を経て、様々な経験を積むことができた。英語の基本的な技能とされる話すこと、聞くこと、書くことを身に付けることができたと思う。また、英語のコミュニケーション能力が格段に向上したと実感している。あまり自分の意見を述べることも得意ではなかったが、その点についてもかなり改善されたと思う。実際に、出国前に英語を話すことのできる知人と会話した時には、うまく自分の言いたいことを伝えることができなかったが、帰国後は英会話が成り立つようになった。また、今回の研修では、ハワイの宗教や文化、歴史等についても学ぶことができた。以下において、その内容について述べていきたいと思う。

第一に、ハワイの宗教に関して述べる。

1778年にキャプテン・クックがハワイにやってくるまでの間、ハワイの人々は、神々、精霊、祖先といった存在を信じていた。また、特別な力を有する人間がいるということも信じていた。特に、神々に属する特別な力をマナと呼び、とりわけ重要視されていた。これは、日本における神道とも通じる考え方であるが、一方で現在のハワイの人々は信仰していない。また、ハワイの伝統の中では、人々と神々は同時に創造されたと考えられている。人間が最初に創られ、次に神が創られたとされる。自然の元では、皆平等な関係にあると言えるであろう。それ故に、火山を司る神とされる女神ペレを始め、数多くの神々を崇めるアニミズムの思想を持つ。この考え方は、日本を始め、ポリネシア圏(ハワイ、ニュージーランド、イースター島を含む三角形内)にも多数見られる。これは、唯一無二の絶対的存在とされる神が、ピラミッドの頂点に君臨する形の構造をとる、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教等と相反するものの見方であると言える。

第二に、ハワイの文化に関して述べる。

日本人にとって、ハワイ語の発音は聞き取りやすく、話しやすいとされる。なぜなら、ハワイ語は日本語と同様、母音が5個であるからだ。アロハやマハロ、また私達が通ったハワイ大学の所在地もモノワであり、ハワイ語である。このように、至るところで現在においてもハワイ語を目にすることが実際にはできる。ハワイ語によく似た言語は、ポリネシア圏においては多々見られる。また、フラダンスやウクレレも親しみやすいハワイの文化と言えるであろう。今回、私達も実際に体験する機会があり、短い時間ではあったが、大変貴重な経験となった。かつてのハワイの人々が、どのような思いを込めたのかわかるものであるように思われた。アロハシャツなども、男性が正式な場で着用する衣装である以上、文化の一つと言えるのかもしれない。

第三に、ハワイの歴史に関して述べる。

カメハメハ王を始め、カラカウア王、リリウオカラニ女王等、ハワイ王家の人々の業績について学んだ。その中でも、カラカウア王は1881年に日本を訪れている。初の日本の国賓であるようだ。日本とハワイの王家の結婚、アメリカによる支配を逃れるための太平洋の同盟、移民(労働力)の確保の3柱が主な目的であった。また、歴史的な建造物についてもいくつか行くことができた。その中でも、イオラニ・パレスは、ハワイ王朝末期の歴史の目まぐるしく変化する混乱の時代の中で、様々な出来事が起こった場所として歴史に名を残している。ハワイ王国最後の王、リリウオカラニ女王が、調印を行ったのも、幽閉されたのもこの場所である。

最後に、日系移民の歴史に関して述べる。

日系人は、忠義、名誉、犠牲、義理、恥誇り、責任、感謝、仕方がない、頑張り、我慢、恩、孝行といった言葉が代表として挙げられる。全てを受け入れた上で、なんとかするしかない、では自分たちに何ができるのかを必死に考えながら生きていくということがよくわかった。悩み、もがき、苦しみながらも、希望の光を失うことなく、ただ絶望するのではない、別の道を歩んだことが身にしみて感じられた。第100大隊、第442連隊といった日系人部隊の生き様がそこには刻まれていた。1868年、元年者と呼ばれる最初の移民団が到着、1885年になると本格的な移住が始まり、ほとんどの移民は砂糖きびまたはパイナップル畑で働いた。日本に帰る人、アメリカ本土へと渡る人も数多くいたが、ハワイに残った人はコミュニティを作り、日本人の価値観と習慣を守り続けた。移民たちは過酷な労働に耐え、子供たちにはよりよい暮らしをさせたいという希望を持ち続けた。

今回のハワイ大学での語学研修は、3週間という長いようであり、あっという間の時間であった。しかし、その短期間で、今後の人生を生きていくにあたって役立つであろう様々なことを勉強することができた。ハワイ自体は、幾度となく訪れている地であったが、旅行として行っていたため、今回のような形は初めてであった。よく行く国であり、期間も3週間では、それほど多くを学ぶことはできないかもしれないという思いもあったが、研修を経て、このような機会を与えられ、参加することができたことに心から感謝したいと思っている。なにより、自分の英語に自信を持つことができたことが最大の成果である。今後は海外に行く際、臆することなく英語を使うことができると確信している。今回の語学研修参加理由は、使える英語を身に付けることであったため、目標を達成することができたと言える。また、これからの国際社会においては、何をやるにしても英語が必要となる日が遠からず来るであろう。そのような日に向けて、これからも日々努力を重ねたい。せつかく学んだことを忘れることほど無駄な時間はないのだ。

今後もまた機会があるならば、積極的にこういったプログラムに参加したいと思う。新たな人生を踏み出す良き一歩となったことに感謝する。



この集中講座に三週間参加させていただいたことにより、私は国内では得られない数多くの貴重な体験が出来た。それは語学のみならず、異文化理解や国際交流など多岐にわたるものである。

私は今までの成績でいうと、英語はあまり芳しいものではなかった。しかし、海外には強い興味があった。そこで今回の集中講座を知り、英語に対する苦手意識の払拭と興味のあることとの両立を図った。実際の授業では二クラスに分けられ、私のクラスでは文法や語法を学ぶことはなく、主に英語で話したり発音について主に学んだ。先生は間違いを気にせず、まずは話すことにチャレンジしてみようと仰っており、臆することなく英語を楽しむことができた。実際にハワイ大学の学生と話す機会もあった。初めの三回目くらいまでは、緊張してばかりで聞くことに精いっぱいだった。しかし次第に慣れてきて、聞くばかりでなく自分からも発言したり、自然なリアクションもとれるようになった。この三週間では、英語に対する苦手意識はなくなった。また、実際に会話を通して外国の人とコミュニケーションをとることに對する恐怖心がなくなり、以前よりも積極的に話そうという意欲的な態度を得ることができた。今後には、TOEICや英検などを利用してつづる自信に繋げていく。

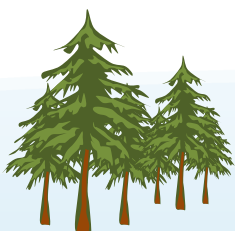
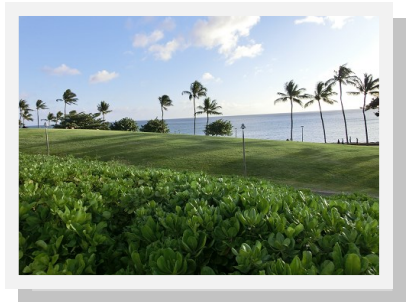
ハワイ大学では、語学のみでなく歴史や宗教についても学んだ。驚いたことに、ハワイは日本と歴史的にみて深い関わりがあったことを日本文化センターなどで学んだ。日系移民がハワイでは多く、その歴史には日本人の出稼ぎがある。しかしその多くは想像をはるかに超える劣悪な労働条件により、日本へ帰ってしまうことを知った。中国への出稼ぎは習っていたが、ハワイでも存在していたことを知り、日本と世界の関わりを更に深められた点が大きな収穫であった。また、毎週水曜日には先生をお招きして、ハワイの宗教・文化について学んだ。ここでも日本と同じ宗教観であるアニミズムが存在していたなど、親和性があり大変興味深かった。他にも天台宗の別院を訪問し、勤行に参加させていただいたり、天台宗ハワイ開教総長である荒先生のお話を伺った。どちらも日本ではできないような体験である。アメリカのリゾート地のイメージが強いハワイに、仏教が浸透していることは意外であり、また私の宗教観に大きな影響を与えた。今回の集中講座に参加したことにより、ただ英語を学ぶのみに留まらず、同時に視野を広げられたといえる。

講義以外の日常面でも私たちは多くの収穫がある。ハワイで三週間過ごして強く感じたことは『百聞は一見に如かず』、ということわざは本当だということ。事件につながるものではないためかもしれないが、容易に謝ってはいけなと聞いたが、現地のハワイの人はすぐに“sorry”と謝っていた。常夏の島といえども朝晩は冷え、薄手の上着が必要になる。食べ物のサイズは日本のものより一回り大きい。映画館の一番大きいポップコーンは大人の男性が抱えるほどであった。更にハワイ大学内での学生は移動手段としてスケートボードが主要なものだった。でこぼこしたコンクリートの道である日本では、あまり考えられない光景である。日々の中で見られるもの全てが日本とは違い、常に新鮮な気分を味わった。しかし、異文化の中に自分がおかれることを辛いとは、不思議と感じられなかった。もともと海外に興味を持っていたこともあるだろうが、何よりハワイ独特のあのゆったりとした空間が、私たちがリラックスかつ開放的にさせていた。私は皆が不味いと言っていたような食べ物でも、なるべく残さないよう努めた。

今日の前にある食べ物が日本でも食べられるとは限らないためだ。ハワイの雰囲気にも押し寄せ、私にはこの集中講座で今までにない積極性が発揮されていた。その積極性が今後の学習または進路に、大きな効果・影響があると信じている。

中でも特に印象的であったのが、戦艦ミズーリー号を友だちと見に行ったことだ。バスに一時間以上揺られ、パールハーバーへ行った。4つの博物館が存在しており、私たちは時間の関係上ミズーリー号と戦艦アリゾナ号記念館を見に行向かった。しかしアリゾナ号の記念館のチケットが既に完売しており、やむなくミズーリー号のみ見に行った。実際に戦艦を見てみると、自身の想像以上のつくりをしていた。私たちが小学校より見てきた日本史からの目線とは異なる、アメリカ目線で第二次世界大戦を垣間見ることができた。戦争の悲惨さのみならず、私の想像をはるかに超える当時の戦艦技術にも圧倒された。オプションにあったガイドの話によれば、大砲一本につきスペースシャトル三本分の重さであること、映画の題材ともなったゼロ戦の操縦者日野節夫さんの話など、貴重な資料も多数見ることができた。日本兵の勇姿を母国ではなく、アメリカで学ぶことになるのは不思議な思いであった。また戦艦の中で暮らしていたアメリカ兵の方々の写真や実際の制服なども閲覧できた。日本では難しいことだ。ここへ訪れたことで今までとは違った歴史観、視点が得られたことが私は嬉しく、来てよかったと心より満足している。

以上のことを総括して、私たちのハワイ大学での春期集中講座はおおいに成功したといえるだろう。参加した全員がそれぞれの目的にみあった収穫が得られた。たしかに、分からない単語も多く、聞き取ることで精いっぱいなのなか、英語で聞き取り英語に変換して話す、ということが求められ、かなり苦戦した。この三週間で私たちが十分な力を身につけたかといえば、はっきりと自信を持って言うことは難しい。しかし私たちは個々の目標を少しながらも得、有意義な時間を過ごせたと、言えると考える。私たちの目的が語学力の向上であったり、異文化理解を深めることであったり、様々である。その目的の達成が大きな自信に繋がり、今後待ち構えているであろうチャンスや困難に対する積極性に結びつくこと確信している。わずかに三週間という大変短い期間での講座であったが、一日一日すべてが濃く、充実しており有意義なものだった。私は今回の講座に参加したことを、ただの経験で終わらせず、新たなものに次々と挑戦していきたい。何より苦手意識の強い英語に自ら挑もうとした自身の勇気とチャレンジ精神が、この講座の成功を示しているのではないだろうか。私にとってかけがえのないものとなったことは間違いのない。



わたしにとって、今回の語学研修が初めての海外に行く機会で見聞のすべてが新鮮に思えた。まず初日にファーマーズマーケットに行った。日本でもこのような農家の方が自らお店を開き販売することがある。だがアメリカの人たちはただ品物売るだけではなく来場した人を楽しませようと歌を歌い、楽器を演奏していた。英語の歌で聞いたことのない歌だったがその場の陽気な雰囲気にもまれて楽しい気分させられた。日本ではただ買い物をしているだけではここまで楽しい思いをすることはなかなかないだろう。アメリカ人たちは皆、他の人を楽しませようとする心があるのではないかと感じた。授業の一環でインターチェンジというハワイ大学の学生と直接話す機会が毎週2回行われた。そこで話した学生達は皆とても楽しそうに会話をし、会話が途切れることはほとんどなかった。また、会話が盛り上がるだけではなく相手のことを笑わせようとしてくる。それもまた相手に楽しませようとする心から来るものだったのではないかと思っている。

わたしたちはハワイ大学で研修を行う前にハワイにおける日系移民の歴史について学んだ。最初に事前学習としてハワイの移民の歴史を学んだ時にはハワイ以外の移民の人達とほとんど同じだろうと甘い考えを持っていた。だが実際にハワイに行き移民の歴史を学んでいくと現地では聞くことのできないような話をたくさん聞くことが出来た。第二次世界大戦での兵士の話やその大戦をきっかけにハワイでの日系人の立場の大きな変化などさまざまな話を聞くことができた。ハワイでは日本人観光客に対し多くの人が日本語で対応している。こういった日本人にとっての快適さも日本から移民で行った方々の頑張りがあるからこそなのだと忘れずに胸に刻んでおきたい。

私はこの研修期間中にバスケットボールの試合を二試合見学した。バスケットボールの試合はハワイ大学のバスケットボール部が他大学のチームと試合をするものだった。この試合はたくさんの企業がスポンサーをして多くの広告が試合の合間に流された。ローカルテレビではその試合結果がニュースになっていた。また、バスケットボールの試合だけではなくハワイ大学の他の運動部も同じように報道されていた。日本での大学のスポーツの放送は年末年始に行われる箱根駅伝と六大学野球くらいではないかと思う。こちらでも日本では大きく報道されるが、1年に1回ほどあり、ハワイ大学と比べると頻度は格段に少なくなる。また、報道だけではなく、学生たちのスポーツに関する興味もすごかった。バスケットボールに限らず、野球、ソフトボール、バレーボールなどの試合にはたくさんの学生が応援に駆け付けるようだ。実際に自分の見た試合にはプラスバンドの応援とチアリーディングの応援があり、会場を盛り上げていた。また現役の学生だけでなく、地元の人々からも大きな声援を送られていた。私はなぜハワイ大学が地元の人々や企業、学生たちに愛されて関心を持たれているのか、とても不思議に思った。残念ながら、この疑問はハワイ大学の研修期間中に解決することができなかったため、このことを少しずつ調べていき日本でも生かせないかと考えていきたい。

私はハワイ大学に行き自分自身の英語力のなさを痛感した。日本での英語の授業だけでは足りないことがまだまだたくさんあった。映画館やバスケットボールの試合での英語はほとんど理解することができず、わかりやすくしゃべってくれるインターチェンジの学生や授業の先生でさえわからないことが多々あった。だが、こういったできなかったこと、わからなかったことを知ることができたのはそれだけで大きなプラスになると思う。このままでは自分の英語力は向上していかないし将来の自分のやりたいことにはつながらないと気付いた。ハワイ大学での研修は自分のやりたいことについて考えさせられる期間であったし考えなくてはいけないと感じた。この経験で自分の英語の学習方法を変えて、

今よりももっと英語を習得したい、そしてその習得できた英語を使ってたくさんの人とコミュニケーションをとりたくて強く思った。今回のこの研修に参加したことは自分の将来についてゆっくりと考えることができたし思いも一層固まった。この経験は私の中の大きな分岐点になり、参加した意義はとても大きなものだった。

最後にこの研修を企画してくださった大学関係者のみなさま、そして両親に感謝したい。この企画は当たり前に参加できるものではなくいろんな人たちが成功に向けて動いてくれていたことは忘れない。この気持ちを無駄にしないためにもこの経験を無駄にせず、人生をよりよい方向に導いていけるようにしたい。



ハワイ大学マノア校に語学研修として学生の身分を持って学生として学べたことは、自身の中で大きな影響を与えた。三週間という短い中で私が感じたことを、日本と比較しながら端的にまとめていく。

一つはハワイの宗教・神話について。ハワイは火山が噴火し、その積み重ねで一つの島が形成された。そのため、ハワイ神話では火山は上位の女性神であり重要視されてる。ハワイ神話の中では万物すべてに力が宿るとされ、その力のことを「マナ」とよんでいる。マナを強く持った祖の男女神が子供たちを生むことにより、様々な神々が生まれた。ハワイ宗教や文化を学ぶ三回の授業が開催されたが、説明された上記の中で私が毎回強く感じていたことは、日本とよく似ているということである。古事記のなかの日本神話は、祖の男女がおり様々な神々を生んだ。八百万の神々である。民間信仰だが、付喪神も同様の類だと考えた。そのため、ハワイの人々は自然豊かなハワイを尊敬し大切にしている。その心は日本人と似通ったものがあると確信を持っている。

二つに、アメリカのエンターテインメント能力について。今回の研修期間中に、ハワイ大学内で催された男子バスケットボール試合を二回とギターコンサートを鑑賞した。バスケットボールの試合は専用のドームで開催され、同建物の地下にはジムも完備されているのが見られた。試合会場はプロの設備と変わらず、中央天井に大きな四面テレビが設置され、専用のカメラマンを設置。アメリカ国歌から始まり大胆な選手紹介、途中のインターバルタイムに入る気球船による商品券・圧縮機大砲により放たれるタオルの配布、ダンスクラブ・チアリーディングによるパフォーマンスや一般観客を巻き込んだスポンサー宣伝、試合のTV中継。とても大学の一試合とは思えない贅沢と企画である。参加した二回とも同様の演出のため、毎回行われていることがわかる。試合のタイトルは「ナイト」とテーマが決まっており、それに沿ったコスプレ・プレゼントパフォーマンスがある。日本と比べては規格外である。

ここまで盛んな理由は、スポーツ奨学金制度の設備がしっかりと整っていることが挙げられる。アメリカ発症のプロリーグはパフォーマンスも含めて運営をうまく行っているのと、アメリカ国民の母国愛の高さから人気を博しているためであるのではと考えられた。

三つに、日系移民とハワイの観光業について。ハワイと聞いて連想するのは南国の暖かい親日の多い海外旅行に最適な場所である、という認識が多いだろう。しかし、親日である理由の大元を探していくと、祖先の壮絶な下積みがあったことを繰り返し様々な方たちが教えてくれた。言葉も何も知らない未知の想像をして自身の身のため家族のため、一世一代の賭けにでて、箱を開けてみればサトウキビ畑で奴隷の日々。そのなかでも日本人の誠実さ、直向な正直な心でしようがないと言いつつ働き信用を得ていく。そして太平洋戦争勃発により積み上げた信用の喪失。また虐げられる日々に戻りし、移民二世は自身のアイデンティティに悩む。それを覆すためにも、誇りを持って行動により信頼を再び勝ち得ていった。ハワイ王朝のイオラニ宮殿にて、数ある言語の中から英語と日本語のパンフレットが置いてあった。そしてハワイ島の様々のところに日本語表記のものをよく見かける。日本優先でおもてなしされている優しさの根幹を、私達は知っておかなくてはいけない。

最後に、双方の歴史の見方・視点についてまとめる。今回の研修には組み込まれていなかったため、班行動でパールハーバーに行った際に戦艦ミズーリに乗船することができた。そこで日本人とみられる方がガイドとして案内を担当していただいた。ミズーリは第二次世界大戦の日本降伏文書の調印式を行った戦艦である。

私は歴史学科日本史コースの所属にしているため、太平洋戦争での日本側の動きはよく学んできた。私は様々な歴史の中でも、特に重きを置いている出来事の一つである。

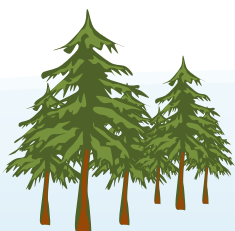
過去に行われた場所を実際に歩くのは重みがあった。最初は戦艦の大きさに興奮をしていたが、説明を聞いていくうちに暗い悲しさが沸き起こりました。特に印象的だったのは、ミズーリに突撃した零式艦上戦闘機の跡がまだ残っており、その特攻機の乗組員が当時19歳であったと紹介を聞いた時はさっと青ざめ心臓が止まるような衝撃を受けた。若いだろうと予測していたが自分と同じ年であったのに不意をつかれずと感じていた痛ましさに拍車がかかった。見た目は綺麗だけれども、本当に、人の命をかけて戦い生活をしてきたことを、艦上で改めて思い知った。

個人的に案内係りの方とお話をした際に、「私はアメリカに来てから知った戦争のこともあるし、この案内の仕事についてから感じることもあった。」という感想を聞いた。

同じく現代にいたるまでの日系移民の話をしてくださった Japanese Cultural Center of Hawaiiの日本人ボランティアの方も「国内だけにいたらわからないことも多いし、実際に自分の目で見て感じて、自分自身で比べることが重要では。」という意見をおっしゃっていた。

私の掲げる信念として、「様々な視点を持つ」ということを持っているが、国内だけではそれも気持ちだけで実際に現地へ足を向けなければ、片側だけの視点を持っているだけだということを身にしみて理解した。

歴史は記録者や立場によって理解の差が生まれるために、今回のような日本とアメリカの情報公開の差や管轄の方法も違うために歴史の認識も見方も変わってくる。もう一つの私の信念として、「何事も経験」というものの実践方法を学ぶことができた。両国の差や違いを含めて自分自身に吸収し、新たな視点を見つけ ていくことができると教えられた。



ハワイ自体はこれまでに2回訪れたこともあり、親近感を感じていましたが、ワイキキから離れるとそこはまたまるで違う、表情豊かなハワイがありました。「人種のるつぼ」と呼ばれ、アメリカ本土とはまた違った色合いを見せるハワイで、私は風土の在り方を少し学べたような気がします。個々を協調しながらも、柔和さを見失わない性格は、また日本のそれとは違って、いい刺激になりました。

現地で受けた大学の授業では、教授の方々の温かみに包まれて、主体性のある授業を受けることが出来ました。双方向性であり、自分の意見や考えを述べる形式で、自分がクラスの一員であることを忘れることはありませんでした。個々の意見や個性を無にしない、寛大な教授に出会えました。

授業の中では、ハワイ語の内容と意味について詳しく勉強でき、その後のハワイについての見方を広げ、それまでのハワイについて奥深く知れたのではないかと思います。特に、alohaとmahaloは思い出深い単語で、日常的になお使い慣れている言葉であるため、ハワイでのショッピングの際によく使いました。Alohaは色々と言葉をも包み、使う者の心を包み、使う者との心をも包み込むだと思いました。私はハワイ短期留学の中で唯一仏教学部に在籍していて、天台宗の別院や浄土宗の別院に参拝させていただいた際には、日本仏教とハワイ仏教の特徴について他の生徒さんよりかは意識できたのではないかと思います。どちらかというミサのようなスタイルで、荘厳さと同時に母性的な愛で包まれているような感覚もありました。日本の寺院形式とはまた異なった、神秘さがありました。今回の留学を通して、旅行ガイドブックを見るだけでは得られない、手に入らない貴重な経験ができました。緑に囲まれ、海に包まれたハワイで、素敵な思い出ができました。



私は2月7日から3月1日まで、ハワイ大学春季集中講座を受講した。ハワイでは大学での授業だけでなく、ハワイに住む人々と実際に会話し、触れ合うことで多くのことを学ぶことができた。ここではハワイで学んだことを、(1)日系移民の歴史と(2)ハワイと日本の文化の違いの2点に分けて報告したい。

(1) 日系移民の歴史

課外活動の中で私のもっとも学ぶことが多かったのは、ハワイにある寺を訪問したこと、ハワイ文化センターで日系移民の歴史について実際に展示物を見ながら学習したことである。今回は天台宗ハワイ別院と浄土宗ハワイ別院の2つの寺院を訪問した。天台宗ハワイ別院では、荒了寛先生からハワイの日系移民のお話を伺うことができた。浄土宗ハワイ別院では日曜礼拝に参加し、婦人会の方と個人的にお話を聞くことができた。ハワイ文化センターでは、ハワイ大学で東洋史を学ぶ学生の説明を聞きながら館内を見学した。

①天台宗ハワイ別院・荒了寛先生のお話から

荒了寛先生からは、日系移民の歴史と移民にとって寺院がどのようなものであったかというお話を聞くことができた。サトウキビ畑で過酷な労働を強いられ、疲弊し荒んだ移民たちが、寺院を中心にコミュニティーを形成することによって秩序立てられていく。その結果として、日本では生活が苦しく子どもに十分な教育を受けさせることができなかった一方で、ハワイでは同じ時期に子どもをハイスクールや大学へ進学させることができるほどまでになっていた。

②浄土宗ハワイ別院・日曜礼拝の参加を通して

浄土宗ハワイ別院の日曜礼拝には2回参加した。1回目の訪問では礼拝の後、婦人会の方々が軽食を用意くださり、そこで婦人会の方と話す機会があった。その方は幼いころから浄土宗が身近にあって自然と信仰するようになったことや、日本の浄土宗の寺院を訪れたことがあるということをお話くださった。その方は英語と日本語と両方話すことができ、寺院が現在でもハワイで生まれ育った日系人が日本語を使う場としての役割を果たしていると実感できた。

③ハワイ文化センター

ハワイ文化センターでは日本人移民の歴史について、さまざまな史料に実際に手で触れながら学習することができた。ハワイ文化センターの中で、もっとも興味をもったのは日本人に固有の「仕方ない (acceptance of resignation)」という考え方だった。1回目の私約移民のうち3分の1が過酷な労働に耐えきれず日本に帰国する中で、日本に帰国することもできなかった人々が「仕方ない」と辛い日々を受け入れ、懸命に生活してきたと説明を受けた。日本にいるときはあまり意味を意識せず使っていた言葉、ハワイで新たな視点で理解することができた。

(2) ハワイで感じた文化の違い

①ハワイ大学での発見

ハワイ大学は大学構内や大学周辺にドミトリと呼ばれる寮があり、学生にとって大学は授業を受ける場所であると同時に生活の場である。大学構内には学食以外にも移動販売のトラックや、野菜を売る屋台を頻繁に見ることができる。特に驚いたのはFREE STOREという、いらなくなったものを他人に譲るためのスペースだった。私が滞在している間、FREE STOREには教科書、パソコン、プリンター、ホワイトボード、室外機などさまざまなものがあり、それらは実際に回収されていた。処理に困ったものを置くのではなく、まだ使えるものを誰か必要とする人のために譲るというリサイクルの意識を見ることができた。

②街での発見

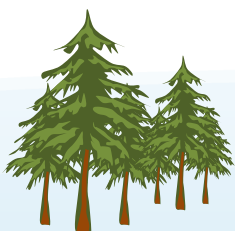
ハワイでの移動は“The Bus”というバスを主に使った。バスの中ではたくさん文化の違いを見ることができた。たとえば、バス停でバスを待っているとき列をつくらないことや、バスが大きく揺れると運転手が“Everyone, OK?”と乗客に声をかけ、それに対して乗客も“OK.”と返すこと、自分が降りるバス停が近くになると立っている人に「座りますか?」と尋ねることなど、日本とは違うハワイの人々の親切さに触れることができた。

春季講座に向けて準備する中で、私はハワイでは日本人として恥ずかしくないよう行動しようと思い決めていた。日本人は礼儀正しく、ルールを守るといった独自の国民性をもっていて、こういった国民性は国際的に認められ、評価されていると思っていたからだ。ハワイでの生活を通して、出発前に私が抱いていた「日本人は親切」というイメージは変わった。日本での「親切」は他者との距離を維持しつつ相手を気遣うことであるのに対し、ハワイで私が触れた「親切」は他者と積極的にコンタクトをとりつつ相手を気遣うことであるというように感じた。他者への気遣いの仕方は異なっているが、どちらも親切な行動である。そのことに気付いたとき、日本人として恥ずかしくないようにふるまうのはもちろん、ハワイの人々がしているようにふるまうことも同じく大切であると気づくことができた。

総括

2つの視点から今回のハワイ大学での研修を振り返ったが、いずれの点にも共通していえることはハワイの人々の日本への関心がとても高いということである。日本からの移民を受け入れ、日本にルーツをもつ人が多いことや日本からの観光客が多いことなど、さまざまな要因が関係していると考えられる。ハワイでは日系人がたくさん生活し、ハワイ大学では日本について勉強する学生が多く、街には多くの日本人観光客が溢れている。ハワイは日本人にとって、英語が話せなくても旅行ができる観光地の1つである。今回の研修で新たに意識するようになったのは、ハワイに住んでいる日系の人々のこれまでの功績によるものではないかということである。日系人で初めてハワイ州知事となったダニエル・K・井上といった著名人だけでなく、寺院の関係者、そして一般の人々が「日本人である」という意識の元にハワイ社会で得てきた信頼が今、日の日本人への信頼の礎となっているのではないだろうかという考えが大きくなった。

しかし、現在ハワイに住んでいる日系人は3世・4世が中心で、「日本人である」という意識は薄れつつある。毎年多くの日本人観光客がハワイを訪れているが、これらの観光客だけでなく今後日本人がハワイで歓迎されるかという疑問を感じる。ハワイの日系移民の歴史を含めて、よりハワイの文化を知る必要がある。



日本に帰ってきて2日目、私はハワイで同じグループだった人たちと早くも再開した。みなひどい寂しさを感じていたから、連絡を取り合ったのである。

私たちは本当に寂しい思いをしていた。ハワイでの日々が何もかも、あんまり素晴らしかったから。私が一番ハワイで素晴らしいと思うのは、あの気候と人々の性格、島全体に流れる空気。

例を挙げてみよう。まず人々について。普段日本で生活をしていて何か建物に入る際、あなたは後ろの人のためにドアを軽く押さえている人だろうか。日本でもそのようにする人はたくさんいるが、私の観察する限り、ハワイではほぼ100%の割合で誰もがそうしていた。またバスに乗車している際、ハワイのバスは自分の降りたいバス停に着くと自分自身でバスの扉を押し開けるシステムなのだが、そこでも降りられない人がいると、友達であろうとなかろうと誰かが運転手に言ってやるのだった。「まだ降りられてないよ!」と。

またこんな話もある。私と友人がストアへ食料を買いにいった時のこと。私が先に会計を済ませ、ドアのすぐ近くのベンチに座ってまっていた。そのすぐ後、友人がガラスドアの向こうで片手にフランクフルト、片手に財布をもって立ち往生しているのに気が付かなかった。隣に座っていた男子学生2人の、「あの子開けられないのかな」という英語が聞こえたのと、その2人が立ち上がろうと腰を浮かせたことによって、私は気づいてあわててドアを開けにいった。これも日本でもそのようにする人がいないわけではない。だが明らかに、私が観察する限り、ハワイの人々は人を手助けすることに敏感である。彼らの身体はさっと動く。私はそういう機会に触れるたびに、日本人は同じように行動するだろうかと考えていた。

日本はマナーにはうるさいが、それはなんだか、礼儀に関することが多い。あーしなくては、こーしなくてはいけない。そしてその割には以外と身近な「すみません」が言えなかったりする人が多かったりする。それはシャイ（と各国からいわれる）な国民性もあるだろうし、日本の文化や歴史もかなり関係しているのだろうけども、ぶつかったら“sorry”、後ろや脇を通るときは“Excuse me”がいつでも聞こえるハワイはいいな、と思った。帰国して2日後、日本で地下鉄にのってさらに強く思った。無理やり黙って通ったり、ぶつかったりする人がたくさんいた。

ハワイの人々についての話はまだまだある。その前にちょっとそれでこの話を。休日に広い大学の敷地内を散歩していると、一組の親子が目に入った。30代くらいの父親と10代前半の少年がスケートボードの練習をしていた。（ちなみにハワイでは自転車よりもスケートボードで移動する人が圧倒的に多い。）私は彼らにインタビューしてみた。

「こんにちは。日本から来ました。ちょっと質問してもいいですか？スケートボードをするのはここでは普通のこと？」

父親の方が一瞬とまどった顔をしたが、すぐに答えてくれた。

「そうだね、私の息子（少年の方を指して）はちょっと大きいけど、普通は8歳くらいから練習しだすんだ。」

おもしろいなと思った。日本ではそのくらいの年から、自転車を練習するのが普通であろう。私はさらにたずねてみた。

「危険じゃないですか？スケートボード。」

父親は右手をひらひらさせながら「少しね。でも気にしないよ。車もわかってるし。」と言った。

そして、そんなハワイのスケボー事情を知った次の日、道でもおもしろい光景をみた。車がスケボーで走る学生に道を譲ると、そのスケボー学生は車に向かってハングルースサインをしたのである。ハングルースサインとは、我々日本人がアロハサインとして認知しているあのサインである。その日から早速私達も使いはじめたのだが、まずこのサインは中々に便利であることに気づく。日本では同じような状況の場合、お辞儀をしたり、小走りなどして感謝の意を表明するが、ハワイでは車がとまってくれたな、とわかったらすぐに右手ハングルースを運転手にピシッと向けて、普通にわたるのみである。とてもわかりやすい。それからもうひとつ嬉しいのは、かなりの割合で相手も応じてくれることである。道を渡るときだけでなく、止まっているバスの運転手と目が合えばハングルース。もちろん向こうからもハングルースが返ってくる。毎朝通る道の駐車場を整備するお姉さんも、道の向こう側から“good morning!”と笑ってハングルース。今度はもちろんこちらが応じる。

ここは人と人がつながるようになってきているのだな、と思った。

こんな話もある。ハワイには珍しく大雨で風が強い日のこと。私はスーパーでレジに並ぼうとしていた。すると後ろから声がかかった。「最後はここよ。」その声の主は肌の黒い、地元の60代くらいの女性だった。彼女は彼女自身の後ろを指さしていた。知らぬ間に抜かしてしまっていたらしい。“Sorry”と書いて私は彼女の後ろに並びなおした。するとまたすぐに声がかかる。

「旅行はどう？楽しい？」

「もちろん。ハワイは全てが最高。」私もすぐに答えた。

「今日はほんとにひどい天気ね。ここじゃとつても珍しいことなのよ。」

「この後天気良くなるかな？」

「わからない。もっとひどくなったら大変だから、食料買いに来たのよ。」

私たちがそんな感じで話していると、その後ろからこれまた地元民らしい、肌の白い若い女性が普通に会話に加わってきた。

「ね、確かにひどい天気よね。最近じゃほんとに珍しい。」

そこからまたレジの順番が回ってくるまで話をしていたのだが、そこでもやっぱり、ハワイは人と人がすぐにつながるな、と思っていた。日本ではなかなかない光景ではないだろうか。全員初対面である。だが店の店員とも普通に挨拶を交わし、天気の話をするここハワイでは、ちっともおかしいことにならない。「Hi」「今日は暑いね。」「調子どう？」

スーパーといえども一つおもしろかった話がある。私がウォルマートというハワイでは（というかアメリカやカナダでも）メジャーな大型スーパーでレジを待っていた時のこと。私は自分の前に並んでいた人の商品がレジに通されていくのをポーッと見ていたのだが、ふいに店員がその手を止め、そして彼女は小わきに置いてあった水のペットボトルのふたをあけて、中身を飲みはじめたのである。「今日は本当に暑い」なんて言って。日本



だったらどうなるだろう、と私は考えた。まず接客中に客の目の前で水分補給することは、ほとんどの場合で許されないだろう。しかも、とくに何の区切りでもなく、まだ打ち終わっていない商品が残っているのに、急に飲みはじめたのである。ちなみにもちろこの店員は他のハワイのほとんどの女性店員がそうであるように、ピアスをし、マニキュアをしていた。これも、日本だったら、スーパーじゃ許されないよなあ、などと考えていた。

日本の今の基準では、お客様は気軽に挨拶を交わし、天気の話をする相手ではなく、「お金をお支払してくれる人」で「最大限敬うべき相手」という考えの方が近いと思う。だからもしこのような店員がいたら、怠惰と評価されるだろうし、客が激怒するだろうし、長く働くことが出来ないだろう。だが、実際どうだろう？日本の基準とハワイの基準。人が働くということに関して、的を得ているのはどちらだろう。

後ろを振り返ってみると、レジの列はまだ当分途切れそうもなかった（この日はとても混んでいた）。そして彼女の顔はその言葉通り、暑いのであろう湯気立っている。では彼女はいつ水を飲もう？今でいいのだ、と思った。

その後も彼女がマイペースにレジを通すのを眺めながら、日本にいた時の友達やパートさんの話を思い出していた。「今日通しだったのに、5分しか休憩ももらえなかった。」「トイレにもいけなかった。」「水飲む暇もなかった。」「タイムカードを押す時間が、実際の出勤退勤時間に関係なく決められている。」などなど。こういう話は、日本では特に珍しい話ではない。最近では表に出て訴える人も多いようだが、まだまだ表にならずにそのような従業員に無理を強いる会社はいくらでもあると思う。そして、まだまだそれを何となく許してしまう人も多い。許していかなくとも、言えないという人も周りにたくさんいる。

目の前の彼女は日本の基準からすれば、怠惰である。失礼である。しかし、その彼女の目の前の客は何でもなさそうに自分の子供の相手をしている。誰も腹を立ててはいない。じゃあいいじゃないか。むしろ、のどが渴けば水を飲む、それで当然じゃないか、と妙に強く日本の仕事の在り方に疑問を持った。

ハワイのやり方が全ていいとは限らないし、実際のところまだ何がいいのかほとんどわからないが、現実今日本の仕事をとりまく環境が悪化している話によく聞きはしないだろうか。日本は、私を感じる限り、高級デパートでもない小売業のすみずみまで、場所によって差はあれど、礼儀やマナーを徹底して要求される。それは日本の宗教観や、文化の影響もあるとは思っているのだが、それに基づいた日本のシステムは、特に都市部、私が住んでいるあたりも、崩壊寸前な気がしている。お客様主義や目上を過剰に敬う主義、礼儀を強要する。そこで働く人の人生というよりは、客のためにいかに尽くすか、そういう基準に見える。働きたくことに対するハードルがぐんとあがるのではないか。ニート、ひきこもり、フリーター、ホームレス、様々なワードが頭を巡った。きちんと調べられていないので憶測や、実際に自分が住んでいる実感でだが、身体を壊したり、心を病んだり、頭をおかしくしてしまったりする人が他の国に比べて多い気がする。実際KAROSHI（過労死）という英語が出来上がってしまったくらいだし。このスーパーの光景に、何か日本へのヒントのようなものがあるのではないだろうか、としばらく考えていた。

ハワイの人々についての話はまだまだある。今度はハワイでの私たちの先生フレディが授業でしてくれた話。「もし自分が友達といるときにまた誰か別の友達と出会い、その友達同士が知り合いでなかったら、君がお互いを紹介しなくちゃいけない。

そうしないことは、ハワイでは、アメリカンカルチャーではとてもrude（失礼）なことだ。」フレディはさらにこのようにつづけた。「紹介しないのは何か特別な理由があるときだけ。例えば気になっている女の子と歩いているとき、友達から声をかけられたらしくは『Hi』とだけ言ってさっさと通り過ぎたよ。」と茶化したその後フレディは笑いながら、「とにかく。いい？アメリカンカルチャーでは自分の友達はずっと紹介しなくてははいけないよ？」と私たちに念を押した。

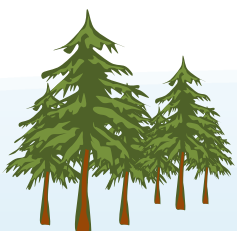
所変わって日本に帰国後、私が大学で友人と話していると、その友人の友人がやってきた。そして2人で話をはじめた。なにやら盛り上がりがある。私などまるでないかのような扱ひである。こっちは一目もくれない。私はつまらないな。と思った。ハワイから帰ってきたばかりであったから、余計に寂しくもあったし、「こんにちは」くらい言えればいいのに、と思っていた。そうしていると、今度は私の知り合いがきたのだが、するとその友人の友人はすぐに別の席へ行ってしまった。これでは人はつながらないな、と思った。ただ空気を読む日本文化においてはある程度は仕方のないことなのだろうな、と思った。まだまだそのような場面で「こんにちは。」と返されないことや、しゃしゃりであるなど嫌な顔をする人も普通にいるだろうし、ご老人ならともかく、若い世代の人に目が合っただけで「良い天気ですね」なんて声をかけたら、変人扱いされてしまってもおかしくない。だがここにもまた、日本がハワイに、アメリカンカルチャーに学ぶべき何かがあるのではないだろうかと考えてしまった。人がつながる社会。

さて、ここまでは主にハワイでの経験や観察したことをふまえた考察であったが、次は宗教の話に移りたい。ハワイにはたくさんさんの仏教の別院がある。その多くは日系移民のためのものだった。日系移民について、そして彼らと仏教の関わりについて学ぶことも、今回のハワイ派遣の大きな目的の一つであったので、その話に移る。

その前にまず、私のそれまでの宗教観について少し記しておきたい。私は今、自分の宗教が何か聞かれたら、それはハワイ派遣後も変わらず「何もない」と答える。日本人にとって、無宗教であるのは特に珍しいことではない。むしろ逆に、何か特定の宗教を信仰しているといえば、私の世代では特に、日本では驚かれるもするだろう。そのような国でずっと生きていたので、書物や話では聞いていたが、宗教というものに対して今いちピンとこないものがあつた。だが今回の派遣先やそれにまつわる一連の学習の中で、少し宗教というものがどういふものかつかんだ気がする。まずはハワイの日系移民と仏教の関わりについて学んだ時。

ハワイの日系移民にとって、仏教は心の支え以外のなにものでもなかった。そしてそれにまつわるコミュニティも彼らを大きく助けた。今から約100年前、楽園と聞いて出向いた先では、週6日朝4時半から夜6時まで、1日30分の休憩のみ、さとうきび畑にてひたすら働かされた。派遣先でJCCH (Japanese Cultural Center of Hawaii) を訪れた際、生のさとうきびを持ち上げられる機会があり、ためしに一本もつてみたのだが、それはずっしりと相当な重さであった。その上に展示されていた、さとうきびを何十本も背中にかつぐ日本人女性の白黒写真に気づいた時、胸にこみ上げてくるものがあつた。

政府と3年契約してしまつたし、帰りたくとも帰るお金もない。それに帰つたとて、日本は超不景気である。（当時ハワイでは低賃金だったとはいえ、日系移民の彼らは日本の4倍の給料をもらえたらしい。）国に帰つてもどうしようもない。受け入れて前に進むしかなかった。



そんな時、彼らの心を大きく支えたものとして、仏教やその別院の存在は見逃せない。普段の生活を超越するためにも、信仰は大切だったし、日曜に別院に集まって食事会を催したりなど、日系コミュニティという面でも仏教は大変大きな役割を果たした。労働条件や賃金の改善を求めてストライキを起こした際もみな院に集まったし、その時経営者側と日本人側の仲介役を務めたのも、住職であった。彼は仏教の教えをもって、憤る日系移民をおさめたい。そして日本人側も譲歩し、死者も出ず、労働条件は少し改善されることが約束され、ストライキは収まった。それだけハワイの日系移民にとって、仏教やそれにまつわるコミュニティの影響は大きかった。

ハワイ浄土宗別院を訪れた時のことである。私達は日曜礼拝に参加し、その後の軽い食事会にも参加したのだが、私はそこで1人の日系移民の女性とお話することができた。その方はひさ子さんといった。彼女の最初の夫は黒人の方で、ひささんはその方との結婚生活をこのように話した。

「ほら、ジャパニーズガールつれてきたもんだから、あとはほっぽいて、もう自分は全然働かないの。ほんとに困った。」

彼女は途中で精神を患い、日本に戻り、日本の病院でしばらく療養していたらしい。「なぜ戻ってきたのですか？」聞くと次のように答えてくれた。

「まずこどもよね。子供に一度会いに行こうと思って。でもそうしたら、ほらあのころは日本がハワイハワイの時でも今もだけど、今よりもっとすごかったのよ。そしてだから旅行会社で雇ってもらえてね、そこで働くのが楽しくなっちゃってね、それでずっと住んでる。」

彼女はほとんど毎週礼拝に参加しているようだ。隣に座る友人の、同じく日系移民の春美さんとのおぼろげ世間話をしているのを見てると、彼女もまた他の日系移民がそうであったように、仏を信じるのと同じくらい、ここで毎週みんなで集まることを大きな心の支にしていたのではないかな、と勝手ながら思った。

またもう一つ宗教の話で印象的だったのは、その日曜礼拝での住職のお話。彼は日系移民や、仏教について軽く説明したのち、少し涙ぐみながら次のように話してくれた。

「助けられると思って、受け入れて、人を助けられなかった経験があります。その時に、人を救うのは人じゃない、仏様だ、と思いました。みなさんも長い人生の中で、すべてを包み込んでくれるものが、大きな支えとなってくれるものが必要になると思います。そのすべてを包み込んでくれるものを、我々は仏とよんでいるんですね。」

宗教というものが人にとってどういうものであるか、また少しつかんだ気がした。神や仏が実際にいるかどうか、それを信じるかどうかが重要なのではなく、人生を生きていくうえで、そういう存在が必要になるときがある、そしてそのような大きな心の支えとして宗教が機能している、私はそんな風に理解した。

話はまた少しそれるが、ハワイから戻って3日後、私はランゲージエクステンジなるものに参加してみた。実はそれはキリスト教団体が運営するもので（ちょうどハワイでも同じ団体のメンバーに勧誘されたことがあった）、少々危ない匂いがしたものの、ランゲージエクステンジ自体は1時間ほど正常に行われた。しかしその後奥のホールからずっと流れていた音楽が大きくなり、参加者の数名に「この後礼拝参加するでしょ？はじまるよ？」と声をかけられた。そこは少し用心して「今日は用があるからこれで帰る」というと、「そっかー残念。また来るでしょ？友達紹介したい！」などと言われ、ホールの前に集まっていた

数人の日本人と一人の外国人に紹介された。そこにいる者はみな、日本社会で暮らしていたらちょっと違和感を感じてしまう、かなりフレンドリーな人々であった。彼らはみな一様に明るかった。作り笑いに見えなくもないがみなにかく笑顔である。1人は飲食店のバイトがえりだといった。そこでこんな風に思った。なるほど、こうしてここに週2、3みなで集って、キリストを信じて、彼女はそのバイトで今私にむけているのと同じような笑顔で元気に働いているのかもしれない、ならばそれはそれで賢いかもかもしれない、と。宗教の役割を象徴的にあらわしている。住職の話思い出した。彼女らは大きな支えとなってくれるものとして、キリスト教を選んだのだ。

私は無宗教で、特に強烈に信じているものはない。だからそういう弱さがあると自分で思う。日常のちょっとしたことに考え込み、労働のシステムについて疑い出したり、人が生きていることに対して考えて抜け出せなかったり。この人たちは、こういう点では多分強いだろうな、と思った。というかそういうものから抜け出したくて、神を信じはじめたのかもしれない。信じれば全て神が救ってくれる。愛してくれる。人類みなイエスの子。みんな兄妹。（キリスト教についてそんなに深く調べたわけではないので、的外れな内容であっても許してほしい）

ハワイのことも振り返ってみた。他人であろうとなかろうと、人と人が、日本と比べると数倍つながってゆく社会。ここにもキリスト教精神が刻み込まれているのだろうか。ハワイ大学でできた現地の友人に聞いてみた。

「あなたの宗教は何？」

「僕は無宗教。」

「ハワイの人はキリスト教が多い？」

「うん。でも僕は違う。」

「ハワイ古来の、宗教はどう？信じている人はまだいる？」

「ほとんどいない。多分ニイハウ島だけ。」

彼一人に聞いただけなので定かではないが、それが本当だとすると、私がハワイでみた、ドアをあけてやったり、店員と気軽に挨拶をかわしたり、天気のはなしをしたり、知らない友達同士を紹介して、握手して、ハグして・・・はやっぱりキリスト教の考えに根付いたものであったのだろうか。みんな神の子であるから？世界は一つだから？宗教をして初めてその国のことをつかみかけた気がした。日本人にその考えはあまりなじみがないが、アメリカの紙幣には今もなおフリーメイソンのマークがどうどうと印刷されている。そんな国々を理解するのに、宗教の話はなくてはならないものだった。日本人もきちっと宗教の役割や、国や人々の思想に与える影響を学んでおかなければならないのではないかな？私たちが思っている以上に、他の国では宗教がその国を支配している。とそんな考えにまで至った。

ここまでで宗教の2つの大きな役割に思い至った。一つは心を安定させる役割。生きている中で、日々の寂しさ、恐怖、生きていることの理不尽さなど、人とのかわりだけでは埋めきれないものを大きく補ってくれるものである。そしてもう一つは、コミュニティとしての役割。人と人をつなげる役割。みんなと同じものを信じ、集い、協力し合う。

世界中どの国にも宗教はある。最近では日本だけでなく、どの国でも、信仰心は若者を筆頭に薄れ始めているらしいが、昔は絶大な力をもっていたようである。それはつまり、人間が生きていくうえで、辛い生活の中、自分の心に折り合いをつけるのもそうであるし、また社会をつくる動物として、そして科学技術がまだ発達していない、協力して生きざるを得なかった過酷な時代を表しているようだ、と思った。



現代はどうだろうか。無宗教の者が増え始めているということは、必ずしも宗教に頼らずとも、何かを信仰し、それをもとにコミュニティを作らずとも生きていける時代になったことの表れではないだろうか。だが依然として物質的に豊かになっても、生きていくことは時に過酷である。今度は精神論が大きくでてきた。科学が発達し、便利な社会になっていくにつれ、考える時間がたくさん作られたのも一つ原因としてあるだろう。私達はそもそもまず生き物が何のために生きているか、そこからわからない。わからなくても、他の生物は生きていくが、人間のみがそのわからなさを認知してそこにストレスを感じる。そして何か困難にあたった時、その問題と向き合うことになってしまう。何故こんな思いをして生きてゆくのだろうか、と。人間にとって、物質的に満たされていることだけが幸福の条件ではない。

日本は物質的にはかなり豊かで便利な国である。しかし、日本人がみな幸せそうにしているかといったらはっきりイエスとは言えない。むしろその逆のように見えることも多々ある。

ハワイ人はどうだっただろう？ぼろぼろの車に乗っている人をたくさんみかけた。建物も日本と比べると、汚れていたり、壊れていたり、古いものが多かった。

ハワイ大学の学生に、ハワイで嫌なところは？と聞いてみたことがあった。特にないよ、たまにハワイアンペースで渋滞がおきることはあるけど。でも特に気にしない。と彼は言った。

浄土真宗の別院で出会ったひさ子さんにも同じ質問をしたことがあったが、その時も彼女は、「ほとんど思いあたらない。そういうのは個人の考え方だし。ここはとにかく自由だし、この年になってほんとにいいなと思うのは気候がいいことね。」と笑って答えた。

同じことを日本人に聞いたらどうなんだろう、と思った。私達は日本のことをそんな風に評価できるだろうか。

だけど一方で私は思い出す。そういうあたたかく、優しく、自由におもえる国の、カートにたくさん空き缶を入れて歩くホームレスの人々を。ワイキキの大通りの真ん中で「私を雇って」と書いた段ボールをぶらさげてうつろな目で座り込んでいる若い男性を。チャイナタウンの人々のたまに鋭く光る眼を。

きっとここにも日本と同じように、何か決定的に足りていないことがあるのだろう。

アメリカはイラクを攻撃した。がそこには根拠としていた核兵器は存在しなかった。中東ではいまだ、戦争が行われている。これは一概には言えないが、何か一つを強く信じる一神教の産物ではないだろうか。信じることはとても強いから、多分多くの場合、人の心を救ってくれるけど、時にとても危ない。

今回この派遣やそれにまつわる学習や考察の中で、宗教についてこのように思い至った。宗教は人が生きていくうえで、とても便利なものだ。そして、人類が発生して以来、その時代時代をなんとか生き抜くのに、なくてはならないものであった、と。

これからはどうなるのだろうか。物理的には、今まで宗教に関するものがまかっていたものはもうクリアされていると思う。大勢で集まらなくとも、私達はたくさんのかを科学技術の進歩によってできるようになった。だがもちろん人のかかわりは明らかに減る。心は？寂しさは膨らむ。多くの寂しさは、人のかかわりによって解消されていくのに。人とかかわる必要があまりなくなってしまう。どうやって人とつながる？どうやって自分の行き場のない気持ちをやり過ごす？

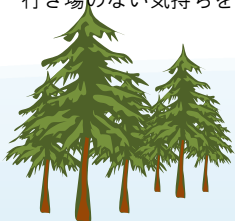
私の友人に年に4回も5回も韓国を訪れる人がいる。また、年に4回も、5回もディズニーランドに行く人がいる。音楽にこだわって、高い器具を買ってわずかな音の違いを楽しむ人がいる。自然食品に異常にこだわる人がいる。ファッションにうるさい人がいる。

あまり宗教を持たない日本人にとって、こういうものが宗教の代わりをつとめているのかもしれない、と思った。

また少しこんなことも思った。日本は無宗教とはいいが、私達が知らず知らずのうちに、日本にはいまだしっかりと根付いている、仏教や儒教や道教や神道の思想があって、そして戦後一挙におしよせてきた基督教の思想がそこにまじりあって、ほとんど気づかないうちに、私たちは生き方や人間との関わり方について、とても混乱しているのでは・・・。

この先の世界はどうなるんだろう？足りないものをどうやって埋めていくのだろうか？何を心の支えにしていくんだろう？宗教なくして、人が強く大きくなるには、どんな方法があるだろう？

今回の派遣で一番大きかったのは、宗教がどんなものであるか、また宗教を取り巻く人や世界の事情を深く考えとて面白い機会になったことである。しかしまた、日本とは違った基準で生きる国や社会や人々を見られたこと、人や人生について考えたりする上で新たな視点をたくさん得られたことなど、全てとても良かった。



私は2015年2月7日から3月1日までアメリカ合衆国のハワイ州にあるハワイ大学マノア校への短期語学研修に参加した。ここに参加するまでの経緯と実際に現地での経験を通して学んだことを報告する。

私がこの語学研修に興味をもったきっかけは、これからの社会で必要不可欠な英語を海外で学ぶ機会が持てるということの他に、渡航先がハワイ州だったことである。ハワイには独自の宗教が存在していたことは知っていたが、詳しく学ぶことはできなかった。この語学研修プログラムは、英語の授業以外にハワイ大学でのハワイ原始宗教の講義や現地の僧侶による日本人移民と仏教の話の聞くことができるという大正大学ならではのプログラムだったので参加することを決定した。

私達が滞在したハワイ大学はハワイ州で最大の総合大学である。多種多様な国籍・人種の生徒が在籍しており、それぞれが明確に自分の夢を持っていたことが印象きだった。授業の一環で交流した学生には日本で先生として働きたいという方やデザインの勉強をして洋服のデザイナーになるという方などがいて、目標のために日々努力している姿は私達が見習わなければならないものだと思う。また、ハワイの原始宗教の講義はアメリカ式の授業でおこなった。日本の大学での講義とは異なり先生が生徒に質問を投げかけ、それを返すことで授業が進んでいくのだが、予習無しでは話についていくことすらできず、英語で答えを返すのは難しかったが、授業の中で疑問に感じたことを即座に聞くことができるようになるとより多くの情報を学ぶことができるようになった。

その授業で学んだハワイの原始宗教およびハワイ王国の盛衰は実に興味深いものだった。ハワイの原始宗教はアニミズムであり、自然現象や動植物が神の仮の姿である。

最上位の神Kaneは空と生命の神であり滝などの清い水の姿をとり、破壊と再生の女神Peleは溶岩の姿をとる。彼女は火山にまつわる多くの神の長女である。多くの神は人間との関わりをもち、ヘイアウと呼ばれる神殿に祀られていた。中でも戦いと癒しの神Kuのヘイアウは生贄を捧げるもので、しばしば敵の捕虜やkapuという掟を破った者が犠牲になったという。

ハワイ王国は1795年にカメハメハ1世によって成立した。彼は優れた人物で内政も外交も順調であった。しかし、彼の死後、カアフマヌがKapuを禁止しアメリカの宣教師がキリスト教を広めたことによって原始宗教は衰退し、ハワイ独自の文化も失われていった。1885年には日本から移民が始まり多くの日本人が農園の労働力としてハワイに渡りそのまま移り住んだ。その後、1900年リリウオカラニの時代にハワイ王国がアメリカ合衆国に併合されるまで、長い間ハワイは独立国家であった。太平洋の中心に位置するという地理的に多くの国がハワイ諸島を領土もしくは属国にしようと考えていた。その中で近代化と外交により約100年独立を保っていたことは驚くべきことである。

ハワイ大学では主にハワイの歴史について学んでいたが、浄土宗や天台宗のハワイ別院でのお話やハワイ日本文化センターでは日系移民の歴史について学んできた。先に述べたようにハワイに日本人が初めて来たのは1885年、日本が明治時代のころである。始めの移民は待遇も悪く苦しい生活を強いられていたが、それでも当時の日本に比べて破格の収入だったので努力を重ねた結果、日系2世のころに大幅に改善されていた。しかし、1941年の真珠湾攻撃の時に日系人というだけで、抑留キャンプに送られるという屈辱的な体験する。そこで彼らは祖国への忠誠の証として軍に志願し、442部隊として活躍した。戦後、軍の補助金を使い大学などの高度な教育を受け、政治家などを輩出することで徐々に人権を勝ち取ることに成功した。彼らの苦難の歴史は同じ日本人の血が流れている者として辛く感じたが、その逞しさを私達も見習うべきであろう。

ハワイでの3週間で学んだことは歴史だけではない。普段の生活で英語を使うことは毎日私達に多くの経験を与えてくれた。英語の授業で先生が話す時は丁寧にゆっくり話してくれるが街中ではそうはいかない。スーパーのレジの女性が話す英語は速く、省略することもあるので始めのころは混乱していたが、何度も通っているうちに聞き取れるようになっていたことは自分でも感動した。また、自分の意見を伝える際も単語のアクセントが正確でないと相手が理解してくれないので、そこを意識して会話するようにした。

これらは日本での英語の授業以上の実践的なもので今回の研修で私が得た最も大きいものであると思われる。

勉強のための海外長期滞在は容易にできるものではない。今回学んだこと、感じたこと、出会えたことを忘れずに、この経験を今後の学生生活、そして人生に活かしたいと思う

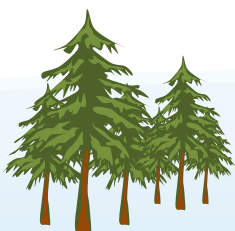


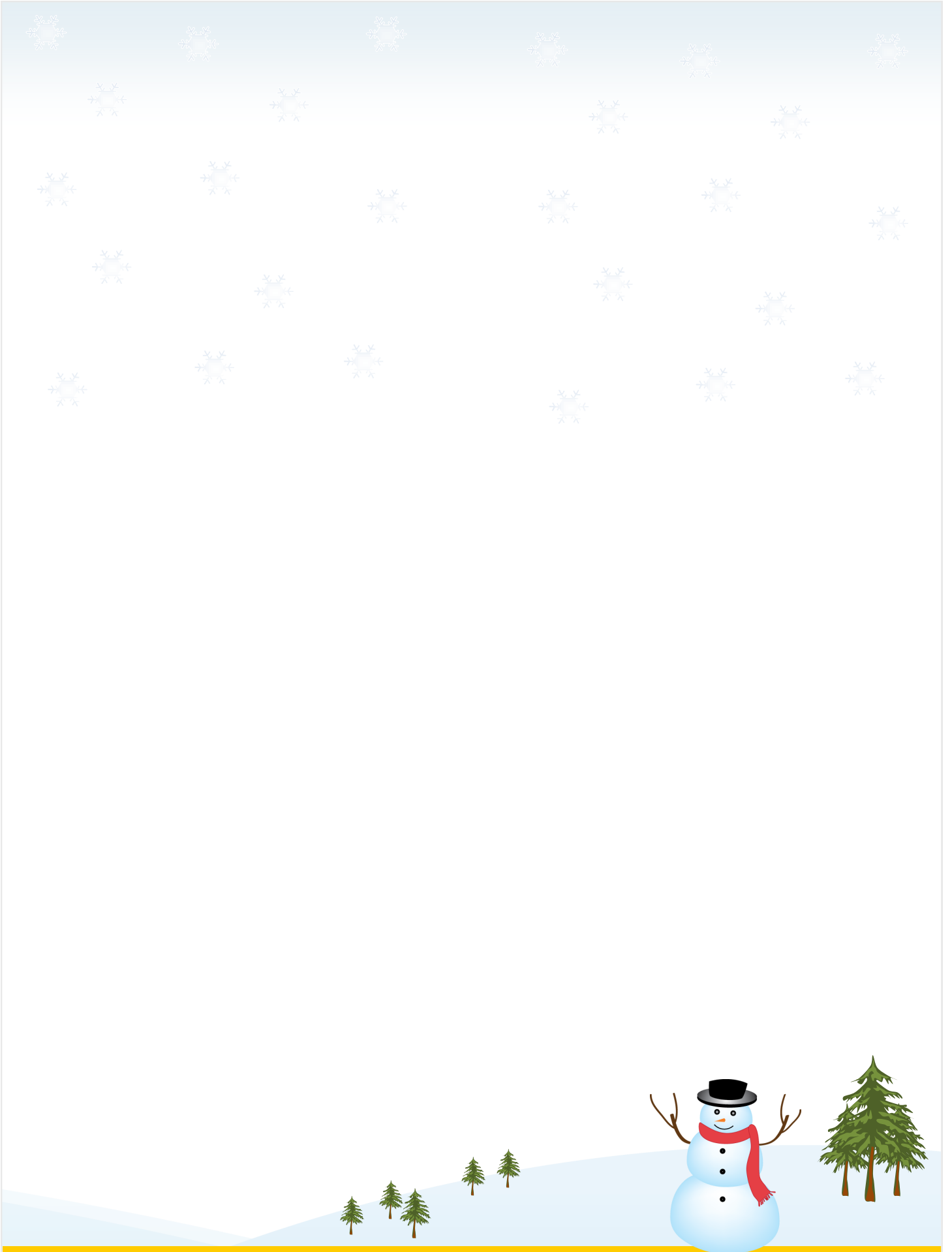
私は今までハワイに対するイメージとして、リゾート地という印象としか持っておらず、そのようなリゾート地で英語を学べるの不思議に思っていました。今回のプログラムには天台宗ハワイ別院だったり、浄土宗ハワイ別院に訪れるというものがありましたが、なぜハワイで仏教がそれほどに信仰されているのかもよくわかっていませんでした。私はこのプログラムで、ハワイの移民の歴史について初めて学びました。慶応4年(明治元年)に初めてハワイに日本人が150人ほど送られ、彼らは元年ものと呼ばれました。当時ハワイはサトウキビの栽培が盛んで、人手が必要だったため、日本人を高い給料で雇うとし、日本人はワクワクしながらハワイに向かったそうです。しかし、実際に待っていたハワイの現実はそんなに甘くなく、奴隷のように扱われ、働かされたそうです。最初は2年という契約でしたが、ハワイで生活しているうちに結婚し、子どもができ、やがて学校やお寺を建て、生活をしていくようになりました。後に戦争画が始まり、日系人だけで100大隊という部隊が作られました。彼らは大変優秀だったそうで、最終的には他の軍隊と合体して、442連隊というものも作られました。この部隊は、314%の死傷率という歴史に残るほどの犠牲者を出しました。この314%という数字は、負傷した兵士は怪我が治ればまた出撃させられたために出た数字だそうです。この話を聞いたとき、この日系の方々は「お国」のために誠実に戦ったのだと愛国心を感じ感動したと同時に、命について考えさせられました。

私は今回が海外に行くのが初めてだったので、いろいろな部分で不安に感じていました。一番不安だったのは、ハワイ大学の人々や現地の方々とは仲良くなれるのか?でした。実際に行ってみると、どのお店の人も日本語で話しかけてくれたり、大学ではInterchangeという企画を通してたくさんの方々のハワイ大学の学生と話することができました。また、大学の中で行われたコーヒアワーという国際交流に参加し、ハワイ大学だけでなく違う学校の学生とも仲良くなることができました。ハワイではたくさんの方が「Aloha!」と声をかけてくれて、日本にはないコミュニティーがあり、現地の人々の明るさや優しさに感動しました。

ハワイ大学での授業は、受動的ではなく能動的な内容でした。私たちのクラスの先生Freddyは、もちろん読み書きは教えてくれましたが、実際に話すことを中心に教えてくれました。アメリカの学校は、先生と生徒という関係でもとてもフレンドリーな関係であるということを教えてくれました。祝日には、クラスの授業ではなく、ワイキキに出て街中を歩きながらワイキキの歴史を教えてくださいました。大学ではフラダンスのレッスンを受け、フラダンスにはたくさんの言葉と意味が込められていることをクムフラから学びました。またチャイナタウンでは、ウクレレのレッスンを受けました。ウクレレの由来は、飛び跳ねる(lele)ノミ('uku)という意味で、楽器の上で奏者の指が跳ねながら動く様子を表現したそうです。休日にはファーマーズマーケットに出かけ現地Dフードを食べたり、映画館に出かけたり、バスケットの試合を観戦したりと、このように、大学の授業だけでなく、実際にアメリカや

ハワイの文化に直接触れることができました。街中に出てみて感じたのは、アメリカの文化は日本とは違ってエンターテインメント性が強いと感じました。私が今回このプログラムに参加するにあたって、目標にしていたことがあります。それは、積極性を身に付けることです。日本には「間」というものがありますが、アメリカにはそのようなものはありませんでした。つまり、何事にも自ら行動を起こす必要があったのです。この3週間で自ら質問する、自ら話しかけるなど、積極的に行動することを心がけました。日本でもこのまま積極性を大切に生活していきたいと思いました。





成果は数字で測れない

報告書の中に、学生たちが強く感じ取っている「世界の中の日本」についてこう述べている。

「グローバル化が進み、日本にいながら世界と繋がるのが容易になった今だからこそ、外国に行く必要がなくなったのではなく、むしろ実際に行ってみて自らの目を見たことを、自分自身で考えることがとても重要になってくるのではないかと思う。井の中の蛙になってはもったいない。」 「日本の歴史からも分かる。島国だから、ということを使い訳に、なかなか世界と触れ合おうと行動してこなかった自分が、結局はすごく日本人らしいと思った。日本のことは好きであり、日本人らしい自分も好きだが、今回の経験を通して、もっと日本を知るべきだと感じ、さらに考えるだけでなく行動し世界に触れたいと思った。」 彼らの言葉ですべてを語っているように思われる。外向的になれずに「内向化」になりつつある大学生たちが多く中で、このような気持ちを少しでもファシリテートできたなら、私達、国際教育を担当する者としては、今後の学生に示すべき操舵は自ずと預けられたのではないかと思う。

今後とも、きっかけを作ること、学生自らに気づきと発見を大切にプログラムの推進に邁進したいと考えている。

名前 ハワイ語学研修文集 2015

住所 東京都豊島区西巣鴨3-20-1

大正大学

教務部学修支援課

国際

電話番号: 03-5394-3039

FAX 番号: 03-3918-9179

電子メール: kokusai@mail.tais.ac.jpp

